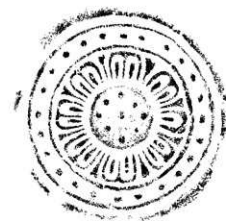


太宰府市の文化財第94集

太宰府・国分地区遺跡群2

—国分松本遺跡第9・10次調査—

—筑前国分尼寺跡第18次調査—



平成18年度

太宰府市教育委員会

太宰府・国分地区遺跡群2

—太宰府市の文化財
第94集—

太宰府市教育委員会

太宰府・国分地区遺跡群2

—国分松本遺跡第9・10次調査—

—筑前国分尼寺跡第18次調査—



平成18年度

2007

太宰府市教育委員会

序

本書は太宰府市国分3丁目1352番地他に位置する国分松本遺跡に関する埋蔵文化財発掘調査報告書です。

今回の調査では、これまでの周辺調査で確認されていた弥生時代中期の生活遺構をはじめ筑前国分尼寺と周辺での瓦生産に係わる所見が得られました。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、ひいては文化財愛護の精神が高揚することを心より願っております。

最後になりましたが、本調査に対しご理解ご協力いただきました、関係各位ならびに諸機関の方々に心からお礼申し上げます。

平成19年3月
太宰府市教育委員会
教育長 關 敏治

例 言

1. 本書は、太宰府市教育委員会が平成17・18年度に実施した国分松本遺跡第9・10次調査及び平成15年度実施の筑前国分尼寺跡第18次調査の報告書である。
2. 本書に掲載した資料の調査に関わる経緯については、各章に記載している。
3. 本書に掲載した資料の整理は、主に平成18年度に実施した。
4. 周辺調査区の配置については本文中の周辺遺跡図を参照されたい。
5. 遺構および遺物の実測及び図の浄書は、調査、整理・執筆担当者のほか長直信・森若知子・久味木理恵・森部順子・木戸雅美・久家春美・福井円がおこなった。
6. 掲載した遺物の写真撮影は(有)文化財写真工房に委託した。
7. 本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。なお遺構の性格を表記する記号については、SB掘立柱建物跡、SA柵列跡、SI住居跡、SK土坑、ST墳墓、SD溝、SF道路状遺構、SXその他の遺構などであり、略号として以下のように記載している。



8. 本書の執筆は柳・山村・中島恒次郎・井上信正、編集は柳・山村がおこなった。
9. 出土した遺物および全ての図面、写真等の記録は太宰府市教育委員会が保管している。
10. 本書で用いる分類は以下の文献に記載されている。

土器・陶磁器・中世須恵器

太宰府市教育委員会 (1983) 『大宰府条坊跡II』

太宰府市教育委員会 (2000) 『大宰府条坊跡XV』

太宰府市教育委員会 (2002) 『大宰府条坊跡XVI』

上田秀夫 「14～16世紀の青磁碗の分類について」 (1982) 『貿易陶磁研究』 No.2

森田勉 「14～16世紀の白磁の分類と編年について」 (1982) 『貿易陶磁研究』 No.2

中世土器研究会編 (1995) 『概説中世の土器・陶磁器』

土師質・瓦質土器

山村信榮 (1990) 「太宰府出土の瓦質土器」 『中近世土器の基礎研究VI』

瓦

太宰府市教育委員会 (1998) 『大宰府条坊跡XI』

九州歴史資料館 (2000) 『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』

太宰府市教育委員会 (2004) 『宝満山遺跡群IV』

弥生土器

太宰府市教育委員会 (2004) 『太宰府・国分地区遺跡群1』 p12,13 (中期)

太宰府市教育委員会 (2001) 『佐野地区遺跡群XI』 p80 (後期)

目次

第1章 調査体制	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
1、位置と環境	3
2、国分松本遺跡第3次調査（山村信榮）	3
3、国分松本遺跡第8次調査（山村）	4
4、筑前国分尼寺跡第18次調査（井上信正）	6
第3章 調査の報告	11
(1) 国分松本遺跡第9次調査（柳智子・山村）	11
1、調査概要と層位	11
2、遺構	11
3、遺物	21
4、小結	40
(2) 国分松本遺跡第10次調査（中島恒次郎）	46
1、調査に至る経過	46
2、基本土層	46
3、遺構	46
4、遺物	47
5、小結	47

表

遺構番号台帳
出土遺物一覧
溝の座標・方位一覧
出土瓦計測表

写真図版

遺構
遺物

CD-ROM

遺構写真・遺物写真
遺構番号台帳
出土遺物一覧
溝の座標・方位一覧
出土瓦計測表

第1章 調査体制

本報告の調査を実施した平成17・18年度、および整理報告を行なった平成18年度の調査体制は以下の通りである。

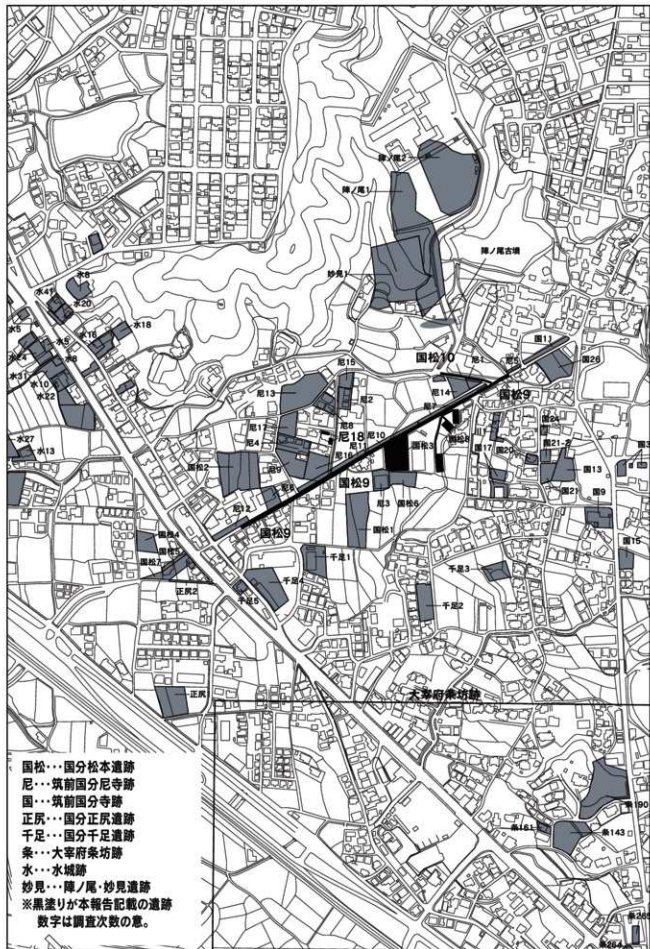
(平成17/2006年度)

総括	教育長	關 敏治	
庶務	教育部長	松永栄人	
	文化財課長	木村和美	
	保護活用係長	久保山元信	
	調査係長	永尾彰朗	
	主任主査	齋藤実貴男	
	事務主事	大石敬介	
調査	主任主査	城戸康利	
		山村信榮	
		中島恒次郎	
	技術主査	井上信正	
	主任技師	高橋 学	
		宮崎亮一	
	技師 (嘱託)	下川可容子	
		柳 智子	(9次調査担当)
		長 直信	
		松浦 智	

(平成18/2006年度)

総括	教育長	關 敏治	
庶務	教育部長	松永栄人	
	文化財課長	齋藤廣之	
	保護活用係長	久保山元信	
	調査係長	永尾彰朗	
	主任主査	吉原慎一	(7月1日～)
		齋藤実貴男	
	事務主事	大石敬介	(～6月30日)
調査	主任主査	城戸康利	
		山村信榮	(9次調査・整理報告担当)
		中島恒次郎	(10次調査・調査整理報告担当)
	技術主査	井上信正	
	主任技師	高橋 学	
		宮崎亮一	
	技師 (嘱託)	柳 智子	(9次調査・整理報告担当)
		下高大輔	

また、現地での調査に対し地元地区の方々には物心ともに厚いご協力をいただいた。



第1図 調査区周辺の遺跡 (1/5000)

第2章 遺跡の位置と環境

本報告の国分松本遺跡第9次調査は全長400mに亘る長大なトレンチ状の調査であり、筑前国分尼寺跡や国分松本遺跡に隣接している。本項では狭小な本調査区を理解するため隣地などでの関連する既存の調査の概要を含めて概観する。

1、位置と環境

発掘調査を行った国分松本地区は大野城から南西方向へと広がる扇状地の谷部に位置する。花崗岩地盤をベースに、第四紀と推定される火山灰堆積層が一部確認されている。谷地形のための洪水層である細砂とこぶし大の砂礫との互層堆積が最深で3m近く堆積している。遺構が形成されているのは砂礫上面の粘質土である。

形成されている遺跡は大きく2時期の遺跡に限定される。まず、弥生時代中期～後期までの環濠を伴う集落跡と甕棺墓群である。また、調査区中心より南の西側には筑前国分尼寺推定地、東に筑前国分寺推定域が所在している。本報告では国分松本遺跡第9・10次調査が工事区間に限定された範囲で調査を行っているため遺構の展開や遺物の位置付けを考察する上では、周辺調査事例を参照する必要がある。国分松本9次調査で大量に出土した瓦については国分松本遺跡第3次調査で検出されている瓦溜まりとの関連性が想定される。さらに国分松本遺跡第8次調査で検出されていた河川堆積との関連性も考えられる。

このことから周辺関連遺跡について以下に記載した。

2、国分松本遺跡第3次調査

a. 主要遺構

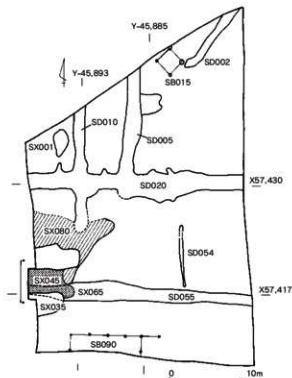
- 国松3SX001 平安時代の瓦溜まり
- 国松3SX035,045 10世紀初頭の溜まり
- 国松3SB090 平安時代前半頃(?)の掘立柱建物
- 国松3SD005, 010, SD002, SD054, SD055
奈良時代の溝
- 国松3SX065 奈良時代の版築遺構
- 国松3SD002 弥生時代中期の溝
- 国松3SB015 弥生時代の掘立柱建物
- 国松3SX080 弥生時代中期の溜まり

b. 概要

調査地の地番は太宰府市国分3丁目475-1で、国分尼寺跡の推定東外郭縁から80m程東に位置する。

検出した遺構には大きく分けて3時期のものがあ

る。平安時代の遺構にはSX001、SX035、SX45、



第2図 国分松本3次全体略図

SB090がある。SX001は瓦溜まりで、瓦の破片が敷きつめられていた。埋土は灰色の粘質土である。SX035とSX045は粗い砂質土の溜まりで、10世紀初頭頃に堆積したものである。SB090は掘立柱建物跡と思われる。東西4間(8.4m)、南北1間分を検出した。

奈良時代の遺構にはSD005、SD010、SD002、SD054、SD055がある。SD005、SD010は南北溝で東西溝SD020と合流する。SD054はごく細い南北溝である。SD055は東西溝で、西端部では5m程にわたって30cm大の石が密集して投棄されていた。時期は8世紀中頃である。この溝からは国分寺創建期の瓦と同一型式の軒丸瓦が出土した。SX065は版築状に土を積んだ遺構で、SD055が埋没した上に造られている。東側は既に削平されているうえ、南北はSX035から切られているため、当初の形状は不明である。道路、塀、建物の基壇の一部などの可能性が考えられる。

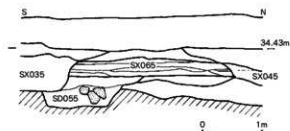
弥生時代の遺構にはSD002、SB015、SX080がある。SB015は柱間2m程の掘立柱建物跡である。SX008は弥生時代の溜まりで、多量の土器片が出土した。南側で調査した国分松本遺跡1次調査では同時期の濠がみつまっているが、埋土や形状が異なるため同一遺構とは言い難い。

国分寺と国分尼寺の間の様相については、両寺を結ぶ道路の存在が知られているが、周辺の土地利用については不明な点が多い。今回の調査で、二寺の創建と前後する時期に正方位に規制された施設が営まれていたことがより明確になった。

3、国分松本遺跡第8次調査

a. 主要遺構

国松8SD001	旧河川跡 (奈良～平安時代前期)
国松8SD002	旧河川跡 (奈良～平安時代前期)



第3図 国分松本3次SX065付近土層図



第4図 国分松本3次北側俯瞰写真



第5図 国分松本3次SX001 (西から)



第6図 国分松本8次北側俯瞰写真

国松8SX003	瓦窯灰原(奈良安時代後期)
国松8SX004	瓦窯灰原(奈良安時代前期)
国松8SD006	旧河川跡(時期不明)

b. 概要

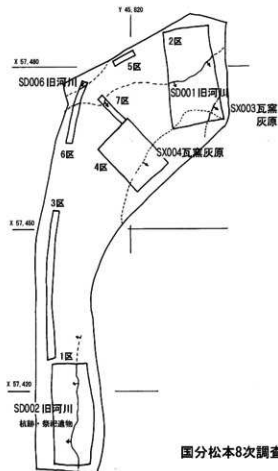
現場では調査区を7箇所に分散して設けた。全ての箇所において旧河川の痕跡が確認され、調査区北東にあるSD001は大きく5層以上の堆積があり、当初の河川幅は20mを越える。南で検出したSD001は大きく4層の堆積から成り、河川幅は西岸が調査区外にあり6m以上になる。SD001と002は同一の河川である可能性が高い。SD002は最終的に平安時代中頃に埋没し、13世紀代の遺物を持つ灰色砂層の小流路がその上から切り込んでいる。

SD001では南東岸の堆積層中に多量の木炭と瓦を含む層が上下2層確認され、焼成不良品や窯体片を含むことから瓦窯の灰原と考えられる。下層の灰原SX004は鴻臚館式軒瓦と縄目叩きの丸平瓦のみで構成される8世紀代のもので、上層のSX003は格子目の叩きを有す丸平瓦が主体で9世紀の土器が共伴している。上下いづれも南西側に薄くなっており、調査区の北東側隣地に窯本体があることを示している。窯は老司式を含まず、国分寺が機能した8世紀中頃から10世紀の幅に取まるものであり、国分寺とは東外郭線の東約120mの指呼の間にあるといえ、密接な関係にあったことは間違いない。

旧河川SD002は埋没途中に腐植土が形成され、その面に密集して杭を打ち込んだ足場遺構のようなものの周辺で斎串を含む木製品が出土し、共伴する土器から9世紀代のものと考えられることから、当該時期に水辺で祭祀等がおこなわれていた場であったことが判明した。

この他、調査区北を東西に横切るもう一つ別の旧河川SD006が存在する。これは本調査北の道路下を平成元年に調査した筑前国分尼寺跡第10次調査の10SD016につながる可能性がある。

主要な出土遺物に瓦類(鴻臚館式軒丸平瓦、



第7図 国分松本8次全体図



第8図 国分松本8次SD002(北から)

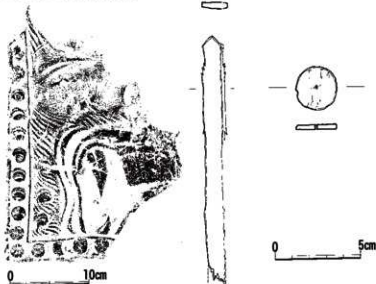


第9図 国分松本8次SX003,004(北から)

大宰府系鬼瓦、齋串、白玉、木札状木製品、越州窯系鉢（8c末～9cか）などがある。

8SX004出土の大宰府系鬼瓦

8SD002出土の齋串と白玉



第10図 国分松本8次主要出土遺物

4. 筑前国分尼寺跡第18次調査

1. 調査に至る経緯

調査地は、太宰府市国分2丁目453-2である。

この一帯は、古くから筑前国分尼寺が所在したと伝えられてきた。江戸時代に記された貝原益軒の『筑前国統風土記』（1709年）には、

「 国分尼寺址

国分村の二町許西にあり、東西八間、南北六間、大きな礎二十許猶のこれり。 」

と記されている。

この時建物規模までわかるほど礎石が残っていたことが窺えるが、その後礎石は急速に失われていき、その位置も次第に曖昧となった。1806年記載の『太宰府旧跡全図』には、「アマ寺ノアト」の範囲の記載がなされているのみとなる。

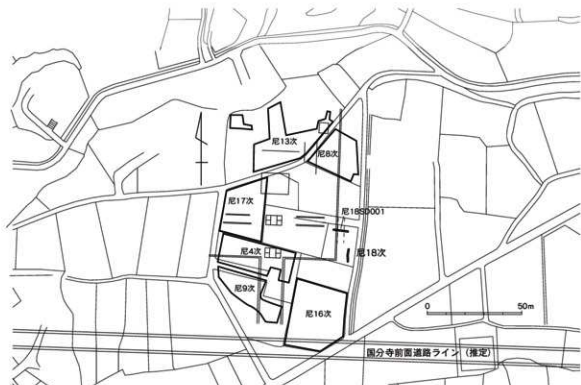
遺跡の場所については、近年まで国分2丁目462-4の水田畦畔上に礎石が一つ残っており、国分尼寺所在の根拠とされていたが、この西側100m付近について太宰府市教育委員会が発掘調査を行ったところ、寺院跡とみられる遺構群が検出された（筑前国分尼寺跡第4・8・9・13・17次調査）。従来からの国分尼寺推定地点については現在も発掘調査は行われていないものの、西側で検出した遺構群の内容から、これが筑前国分尼寺跡である可能性は高いと推測されている。

今回の調査対象地は、発掘調査で検出した寺院跡の東南角にあたる位置にあり、寺域を示す遺構の検出が想定されている場所である。

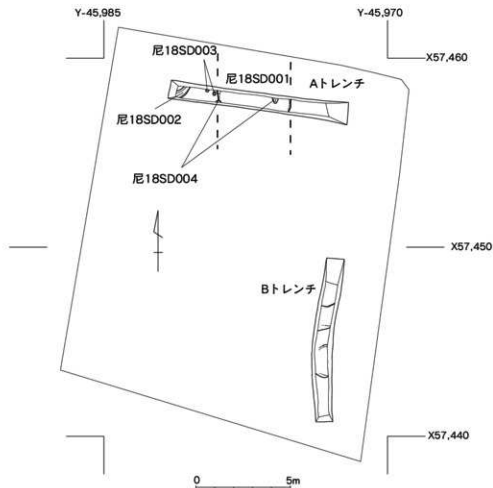
この土地については、以前から建築等に際する事前問い合わせが文化財課にあっており、少なくとも寺域確認を行うための確認調査を行う必要がある場所であること、遺跡の内容や開発内容によっては遺跡の内容把握や保護についての調整を行う必要があるということで、福岡県教育委員会とも協議を行っていた。

平成15（2003）年9月18日、専用住宅を建築するにあたっての事前問い合わせが文化財課にあった。そこで遺跡の状況を伝え、確認調査を実施することで協議した。翌19日に調査実施の承諾書および文化財保護法第57条の2の書類提出があった。すぐに福岡教育事務所を通じて県教育委員会文化財保護課と協議し、口頭にて確認調査必要との回答を受けたため、調整を図り、9月25・26日の両日で確認調査を実施することにした。

確認調査は、建物建築位置をなるべく避けてトレンチを入れることにした。トレンチは筑前国分尼寺跡第8次調査で検出した東外郭線と推定されている南北溝（N8SD015・025）の延長上に1ヶ所（Aトレンチ）、筑前国分尼寺跡第4次調査で検出した南外郭線と推定されている東西溝（N4SD030）の



第11図 筑前国分尼寺跡18次周辺図 (1/1000)



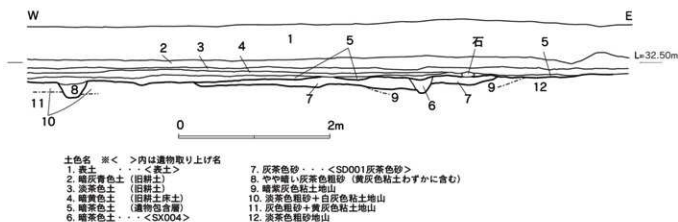
第12図 筑前国分尼寺跡18次遺構配置図 (1/200)

延長上で尼8SD025延長部より東側で1ヶ所 (Bトレンチ) を設定した。調査は、遺構検出後、必要とされる部分のみ掘削し遺物取り上げを行った。調査後はすぐ埋め戻しを行った。測量等は後日行い、10月14日に終了した。

なお、調査後は、地下の遺構保存について地権者にあらかじめ協力をお願いした。

2. 遺構 溝

尼18SD001
(図12、Pl13-1、



第13図 筑前国分尼寺跡18次土層図 (1/50)

CD写真52・53

Aトレンチの中央で検出した南北方向に走行する溝と想定している遺構である。幅約3.9mで、長さ約0.6m分を検出した。埋土は灰茶色砂が0.05～0.15m程度の厚さで薄く堆積する。複数の溝が切り合っている可能性も想定したが、今回の範囲では確認できなかった。ここからは弥生時代の遺物のみが出土している。

その他の遺構

尼18SX002 (図12、Pla13-1、CD写真52・53)

Aトレンチの西端で検出した遺構である。幅約0.35mで、長さ約0.85m分を検出した。溝の可能性が高いが、詳細は不明である。ここからは弥生時代の遺物のみが出土している。

尼18SX004 (図12、Pla13-1、CD写真52・53)

SD001埋土に切り込む小穴群である。この内の一つから奈良時代の瓦片が出土している。

3. 遺物

尼18SX001灰茶色砂出土遺物 (図14、Pla14-1、CD写真95)

弥生土器

甕(1・2) いずれも口縁部の破片である。1は残存高1.5cmを測る。器面は風化しており、調整については不明である。胎土には径1mm以下の白色砂粒を多く含む。焼成は良好で、橙灰赤色を呈す。2は残存高2.1cmを測る。器面は風化しており、調整については不明である。胎土には径1～3mm以下の白色砂粒を多く含む。焼成は良好で、橙灰茶色～灰茶色を呈す。

尼18SX002出土遺物 (図14、Pla14-2～6、CD写真96～100)

弥生土器

甕×壺(1～3) 1は口縁部の破片である。残存高3.7cmを測る。器面は風化しており、調整については不明である。胎土には径1mm以下の白色砂粒を多く含む。焼成はあまく、黄茶褐色を呈す。2は底部の破片である。残存高5.1cm、底径10.0cmを測る。風化が進行しているが、外面には器面調整を施している様子が観察される。胎土には径1mm以下の砂粒を多く含む。焼成はややあまく、外面は赤味がかかった淡黄灰色、内面は淡黄灰色、断面は淡黒灰色を呈す。3は底部の破片である。残存高7.9cm、底径9.0cmを測る。風化により調整不明。胎土には径3mm以下の砂粒を多く含む。焼成はあまく、外

面は淡黄灰色～淡橙灰色、内面は淡茶褐色を呈す。

尼18SX004出土遺物（図14、Pl.14-5・6、CD写真101・102）

瓦類

平瓦（1） 残存長8.4cm、残存幅8.5cm、厚さ2.5cmを測る。凹面は布目痕が、凸面は縄目叩きが観察される。胎土は径2～3mm以下の砂粒を若干含む。焼成はややあまく、淡黒灰色を呈す。

4. 小結

今回の調査地は、発掘調査で推定されている筑前国分尼寺伽藍の東南隅に位置し、外郭施設の確認を目的として2ヶ所にトレンチを設けた。

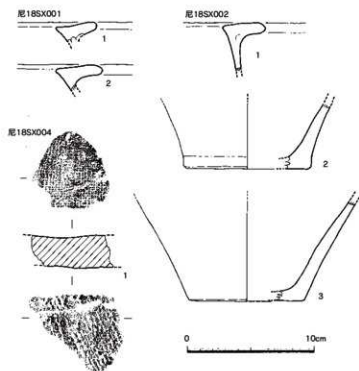
東外郭線については筑前国分尼寺跡第8次調査で検出した南北溝（尼8SD015・025）の延長上で、南北溝と想定される遺構（尼18SD001）を検出した。溝幅が広いため、複数の溝が切り合っている可能性も想定されるが、今回観察した限りではその状況を確認できなかった。残存している遺構の深さも0.15mと浅いが、第8次調査の南北溝も0.2m程度であり、一帯は後世の削平の影響を広く受けているものと考えられる。なお、弥生時代中期の遺物の出土しきまなかったのは、調査範囲が狭小であったことに加え、この一帯に弥生時代中期の遺跡が広がっていることに起因するとみられる。

南外郭線延長上については、筑前国分尼寺跡第4次調査で検出された東西溝（尼4SD030）推定ラインが敷地南縁沿いに位置し、地上には植木等も残されていたため、推定ライン上に直接トレンチを入れることができなかった。このため、東外郭線より東側にトレンチを入れ、南外郭線が延長されるかどうかの確認をおこなった（Bトレンチ）。結果としては、トレンチの位置で南外郭（尼4SD030）の延長は確認されなかった。このことは、これまで推定されていたように、東外郭と南外郭の交点が逆L字型に折れ東には延びないことを裏付けるものである。なお南外郭線延長ラインより北側にて、2基の土坑または溝と推測される遺構を検出した。これらは、いずれの深さも5cm前後しかなく、遺物も出土していない。つまり遺構または包含層の一部といった可能性も窺えるが、一帯が広く削平されていることは前述のとおりであり、ここでは遺構の可能性も考えておきたい。

以上、まとめとしたが、今回の調査は確認範囲が限定され、国分尼寺に関連する時期の遺物がほとんど出土しないなど、十分とはいえないものとなった。ただ、これまでの寺域東側の推定ラインをくつがえず内容のものはみられなかったことが成果といえよう。

参考文献

- 『福岡県遺跡等分布地図 筑紫野市・春日市・大野城市・筑紫郡編』1980福岡県教育委員会
『太宰府市史 考古資料編』1991太宰府市

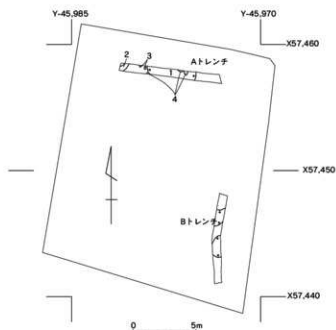


第14図 筑前国分尼寺跡18次出土遺物実測図(1/3)

『太宰府市史 環境資料編』2001太宰府市

『筑前国分尼寺跡Ⅱ -筑前国分寺跡第11次調査・筑前国分尼寺跡-』1991太宰府市教育委員会

『筑前国分尼寺跡Ⅲ』1995太宰府市教育委員会



表土	
遺草層	草
弥生土層	黒(深灰Ⅱ式)
瓦類	平瓦(編目(一枚作り?))、編目(横溝あり)
S-1 灰茶色砂	
弥生土層	黒、赤(弥生中期)、赤(丹塗)、磨台?
S-2	
弥生土層	黒×赤、赤(丹塗)、磨台
S-3	
弥生土層	黒×赤
S-4	
遺草層	草?
弥生土層	黒、黒×赤
瓦類	片、平瓦?(編目)

第15図 筑前国分尼寺跡18次遺構配置図(1/300)

表2 筑前国分尼寺跡18次出土遺物一覧

S-番号	遺構番号	種別	備考	埋土状況 (古→新)	遺構間切合 (古→新)	時期	地区番号
1	尼18SD001	溝	筑前国分尼寺跡外郭に関する遺構と推定される	灰茶色砂	1→4	弥生中期～	Aトレンチ
2	尼18SX002	小穴×溝		灰茶色砂		弥生中期～	Aトレンチ
3		小穴群				弥生中期～	Aトレンチ
4	尼18SX004	小穴群		暗茶色土	1→4	奈良～	Aトレンチ

表1 筑前国分尼寺跡18次遺構番号台帳

※遺構の方向は、各点を北端とし、尼18SD001任意中点を南端として計測

遺構名	計測位置	座標値 (国土院測法第Ⅱ系(旧国測系))		遺構の方向 (尼18SD001任意中点を南端とする)
		X座標	Y座標	
尼8SD015	任意中点	57,496.50	-45,978.90	G.N.2° 17' 26" E
尼8SD025	任意中点	57,495.25	-45,978.16	G.N.1° 14' 15" E
尼18SD001	任意中点	57,457.75	-45,977.35	

表3 筑前国分尼寺跡18次 溝の座標・方位一覧

第3章 調査の報告

(1) 国分松本遺跡第9次調査

1、調査概要と層位

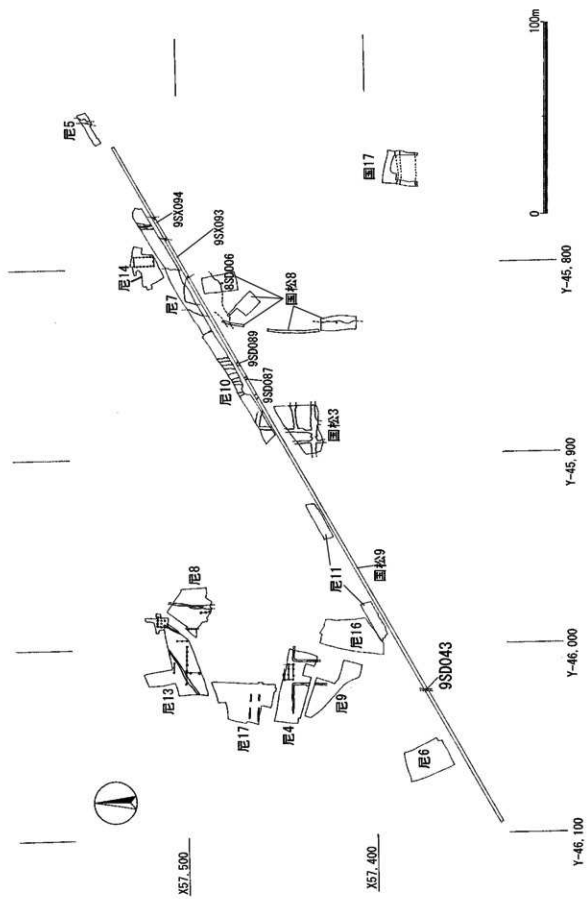
調査地は太宰府市国分2丁目1352番地先に所在する。平成14年7月19日に起こった災害後の陣ノ尾雨水幹線工事に伴い、発掘調査を行なった。調査区北側に隣接して筑前国分尼寺跡の調査が行われており、弥生時代中期の集落跡や筑前国分寺の築地跡などの遺構が確認されている。このことから本調査区でも同様の遺構が検出される可能性が高いと判断し、工事掘削に合わせて遺跡の確認と発掘調査を行った。現地での調査は太宰府市教育委員会が平成17年10月7日～平成18年8月18日にかけて実施し、開発者は太宰府市まちづくり技術開発課である。調査面積は1720㎡である。調査は柳智子、山村信榮が担当した。

調査箇所は工事施工区間の幅4mの内、シートパイルと覆工板（一枚＝幅1m、長さ3m）設置箇所を除く幅2mのなかで調査を行った。覆工板一枚の長さ3m、幅2mの区間で区を設定した。工事の進行に合わせて、西端から調査と作図を行った。

各区の状況は遺構密度や削平の具合に偏りが見られた。1～26区までは調査区の南半分が大きく削平を受けていた。このため、約1m分の幅で遺構を確認し、弥生中期中頃までの小穴や溝が検出された。遺構面は現況アスファルト道路面から約40～50cmの碎石を除去すると、茶色粘質土と黄褐色粘質土の地山が確認できた。27～29区までの区間では前区のような削平は受けておらず、黄褐色粘質土上面で奈良時代の小穴と溝を検出した。30～48区では現況アスファルト道路面から約40～50cmの碎石と約50cmの真砂土を除去するとコンクリート舗装道路を検出した。コンクリート舗装の由来は現状では全く分からない。礫を多く含む灰色粗砂の地山を確認し遺構を検出することはできなかった。49区以东でコンクリート舗装は確認できず、約100～120cmの碎石と真砂土を除去後、弥生時代中期中葉までの遺構を検出している。52～60区にかけては同時期の灰色粗砂堆積の河川跡を検出した。61～70区、75、76区は奈良時代までの遺物を含む茶褐色土の包含層下に弥生時代中期前半までの小穴を検出した。地山は黄褐色シルトと灰色粗砂の互層堆積土である。77～85区までは遺構は検出されなかった。86区以东は灰色砂礫の河川堆積地盤に古代以降に形成された溝（9SD087・089～092）と思われる遺構が確認された。91区では工事作業（シートパイル打ち込み）中に黒茶土から大量の瓦が出土し、拾える限り回収した。この瓦は遺構に伴う出土ではないが、91区南に隣接した国分松本遺跡第3次調査で確認されている瓦溜まり3SX001の続きの可能性がある。本報告では黒茶土を遺物包含層として捉え、その一括遺物として扱う。107区以东の地山は花崗岩風化土岩盤で河川跡（9SX093・094）が検出され、出土遺物には奈良時代の瓦や供膳具などが出土している。遺構が形成される地盤である黄褐色土及び黄褐色シルト、灰色粗砂より下層には約3mにおよぶ黄色砂礫層が堆積している。砂礫層の下には筑前国分尼寺跡11次調査でも確認、指摘されていた火山灰を含む黒茶色粘土層が認められた。洪積世に形成された粘土層とその後の洪積世に堆積した砂礫層が107区以西までの地盤層になっていると推定される。

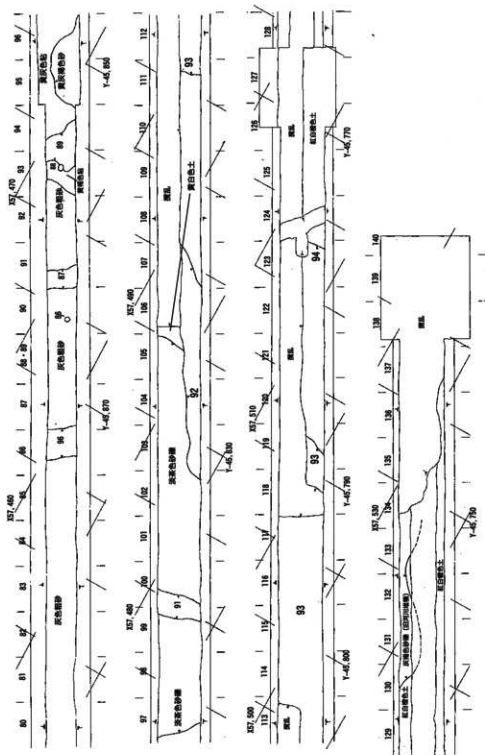
2、遺構

今回の調査で検出した遺構は弥生時代中期中葉と奈良時代の2時期に分けられる。全体として遺構に伴い出土した遺物のほとんどが弥生時代中期中葉である。奈良時代の遺物は河川堆積と包含層から出土した瓦が主体を占めている。遺構は検出を行った区ごとの削平状況によって偏りが大きく、調査区の制

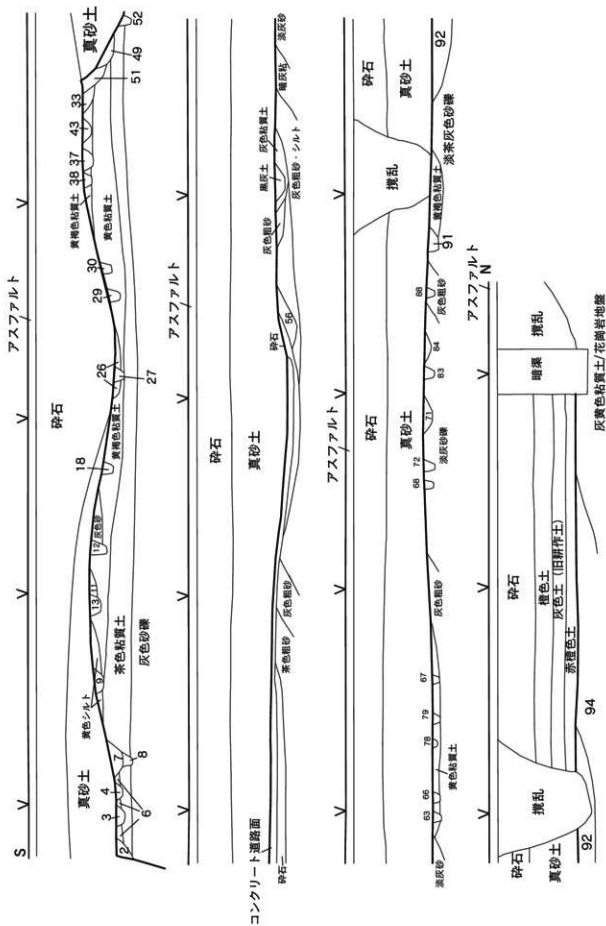


国松・・・国分松本遺跡 尾・・・筑前国分尼寺跡 国・・・筑前国分寺跡 数字は調査次数を表記

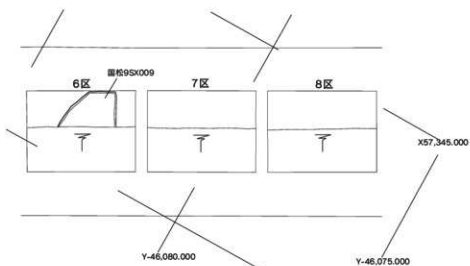
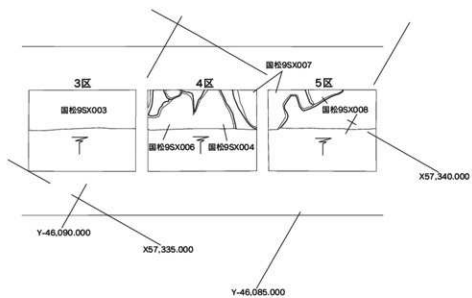
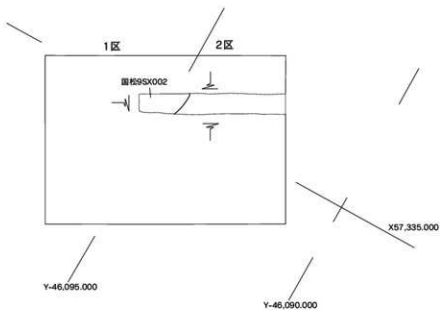
第16図 国分松本9次周辺遺跡図 (1/2000)



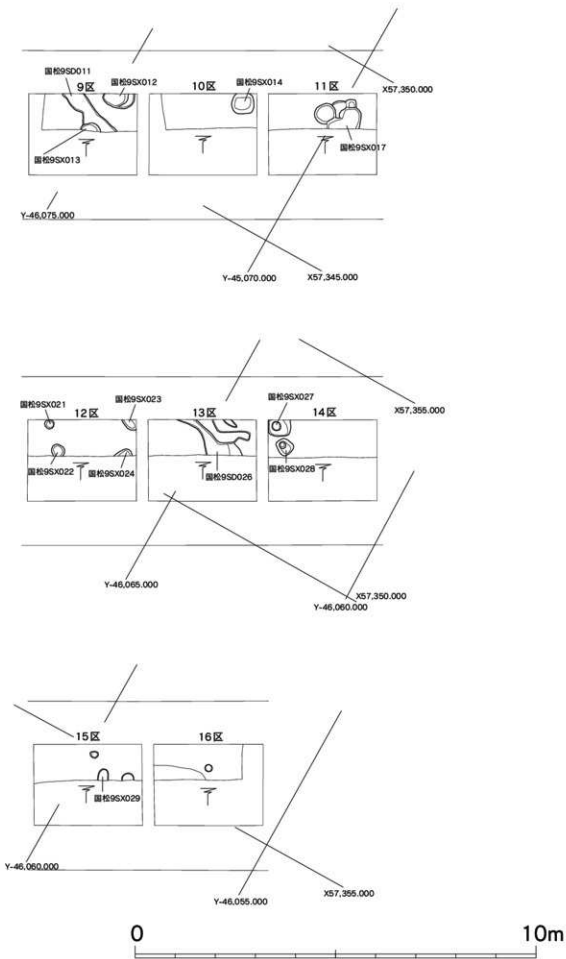
第18图 国分松本9次 全体略图2 (1/250)



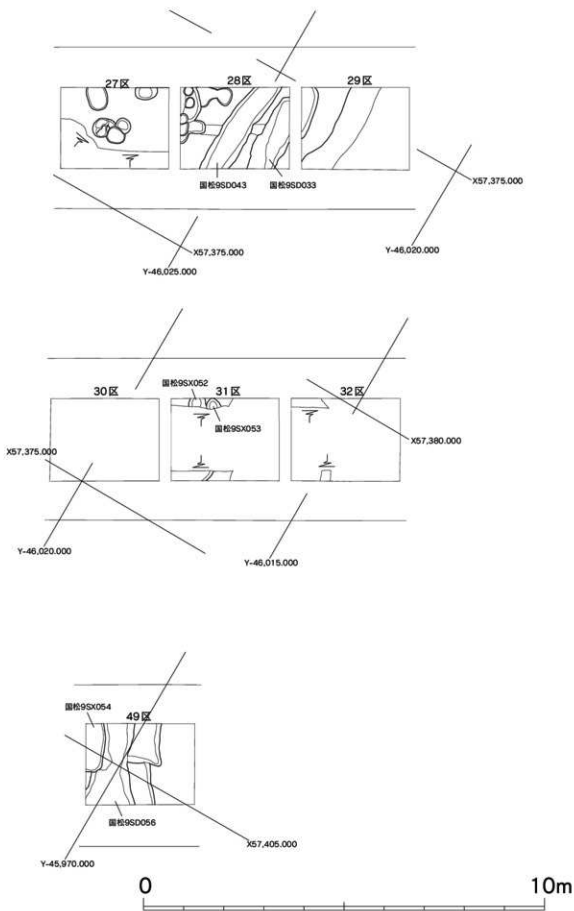
第19図 国分松本9次土層略図



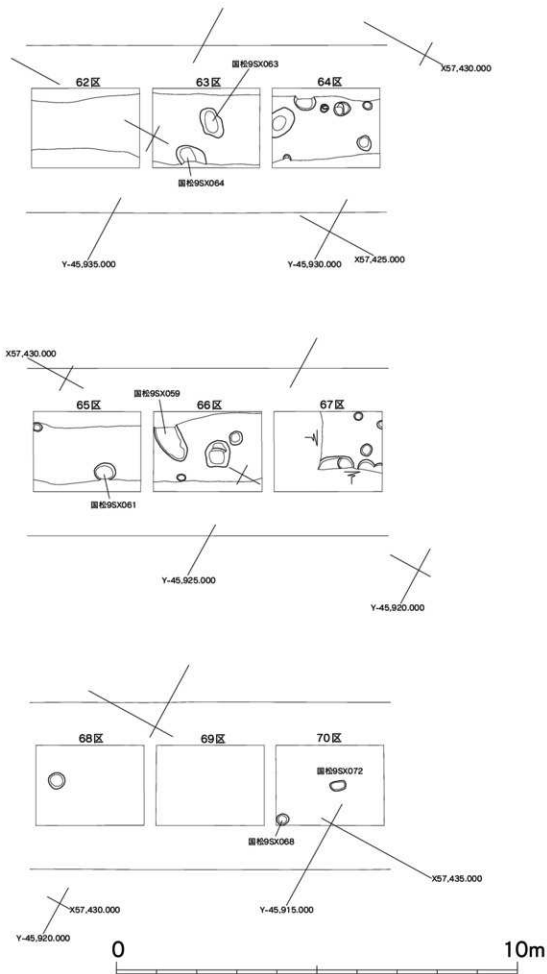
第20図 国分松本9次 1～8区遺構実測図 (1/100)



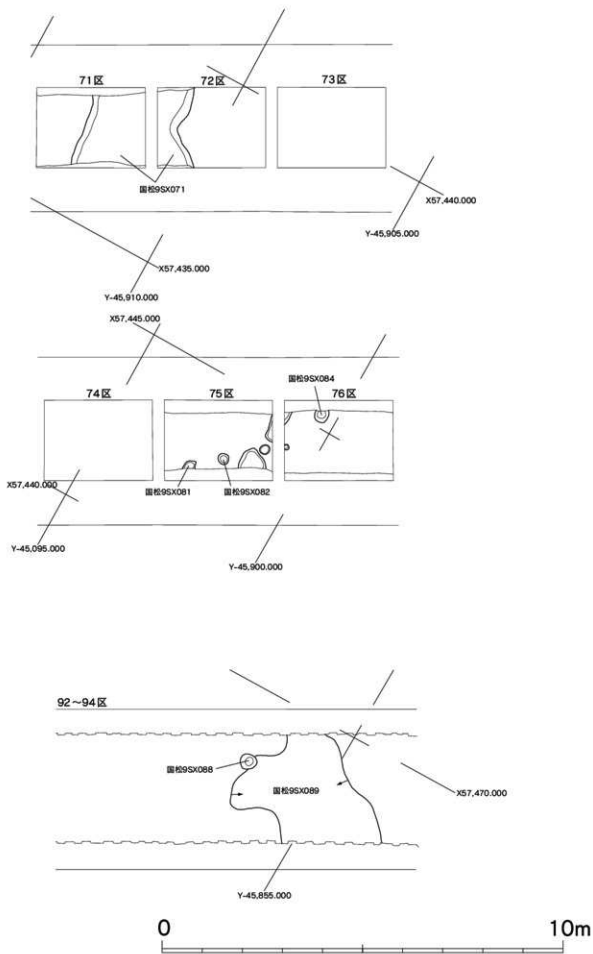
第21図 国分松本9次 9～16区遺構実測図 (1/100)



第22図 国分松本9次 27~32・49区遺構実測図 (1/100)



第23図 国分松本9次 62~70区遺構実測図 (1/100)



第24図 国分松本9次 71・72・74～76・92～94区遺構実測図 (1/100)

約から建物プランを把握することはできなかった。しかし、弥生時代中期の遺構は非常に深く掘り込んでおり、生活関連遺構の一部であることが確認できた。

溝

国松9SD043 (図22、Pla3-4、CD写真17)

28区で検出された南北溝である。黄褐色土地盤に切り込む遺構で、埋土は灰色土である。削平により深さは15cmしか計測できなかった。検出された溝の長さ140cm、幅60cmを測る。検出位置はY 46,025にあることから筑前国分尼寺跡4,9次で検出された、参道の機能を持つ前面道路側溝の延長であった可能性も想定される。

国松9SD054 (図22、Pla3-6・4-1、CD写真19・20)

49区で検出された南北溝である。黄色シルト地盤に切り込む遺構で、埋土は灰色土である。削平が著しく深さは約10cmほどしか計測できなかった。

国松9SD087・089～092 (図17、CD写真35)

91～107区にかけて検出した溝である。灰色砂礫の河川堆積地盤で検出された遺構である。

河川跡

国松9SX093・094 (図18)

117～123区にかけて幅約50cmの河川跡を検出した。黄褐色花崗岩風化地盤で検出された遺構で埋土は淡茶灰色砂礫、赤茶色砂礫である。この河川跡は国分松本遺跡第8次調査で検出されていたSD006と同一遺構の可能性がある。

遺物包含層

黒茶土 (図18)

国分松本遺跡第3次調査西付近で確認された瓦を大量に含む包含層である。調査区内で面的に確認できた状況ではなく、工事掘削作業中に発見したものである。国分松本遺跡第3次調査で検出された瓦溜まり3SX001とその上位に堆積した遺物包含層と同一の可能性が高い。瓦の時期は8世紀～11世紀中頃までと考えられる。

3. 遺物

国松9SD043出土遺物 (図25、Pla6-4、CD写真67)

瓦

丸瓦(1) 凹凸面ともに丁寧なケズリ調整がある。若干凸面に格子目、凹面に布目痕が認められる。側面調整は条坊68次の分類(「大宰府条坊跡X」1998太宰府市p181)では分割後未調整a0である。

国松9SD054出土遺物 (図25、Pla6-4、CD写真67)

瓦

丸瓦(1) 凸面は線が細く、小さな横長斜格子目である。凹面と側面の調整は磨耗のため不明。

平瓦(2) 凹面は横長斜格子目である。格子目の凹凸がリバーシしているのが特徴である。凸面は粗い布目痕が残る。

国松9SD087出土遺物 (図25、Pla6-4、CD写真67)

須恵器

環a×c(1) 口径14.8cmを測る。端部に向い緩く外反する。

環c(2) 底径7.4cmを測る。低い四角形の高台が内側に付く。

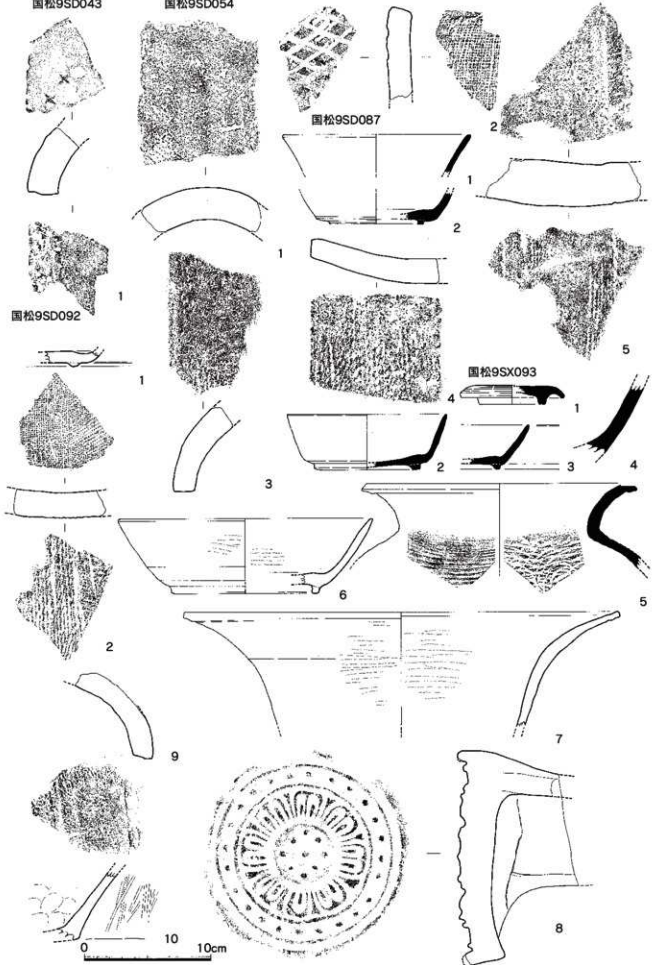
国松9SD043

国松9SD054

国松9SD087

国松9SX093

国松9SD092



第25图 国分松本9次 溝・河川跡出土遺物実測図 (1/3)

瓦

丸瓦(3) 凸面は縄目叩きで、凹面には若干布目が確認できる。側面調整は平面的なケズリ後凸面側に面取り調整c2である。

平瓦(4、5) 4は凸面縄目叩きで、凹面は磨耗のため調整不明である。側面調整は平面的なケズリ後凹面側に面取り調整B3aである。5は凸面に縄目叩きで、凸面には模骨痕と全面に糸切り痕が確認できる。厚さ3.5cmを測る。

国松9SD092出土遺物 (図25、Pl6-5、CD写真68)

土師器

皿×椀c(1) 底部高台は貼付けで橙褐色を呈す。

瓦

平瓦(2) 凸面は縄目叩きである。凹面は糸切り痕が残るやや粗めの布目痕がある。凹面表面が黒く焼かれている。

国松9SX093出土遺物 (図25、Pl6-5~7-2、CD写真68~71)

須恵器

蓋(1) 口径8.2cmを測る。欠損によりつまみ有無は不明。折り返しの端部が沈線状に窪む。

坏c(2、3) 2は口径12.6cm、器高4.4cm、底径8.4cmを測る。3は器高3.5cmを測る。

壺a×b(4) やや厚手の胎土で壺と判断される。

甕(5) 口縁端部は玉縁状で、頸部は「く」の字に屈曲して外反する。口径21.6cmを測る。外面のタタキ目は一部擬格子状で、対応する同心円文が内面にある。

土師器

大坏c(6) 口径20.0cm、器高5.9cm、底径11.6cmに復元されるやや大振りな坏で、摩擦で明瞭でないが体部の内外面に横位のミガキaが施される。淡橙褐色を呈す。

鉢(7) 口径が34.4cmに復元されるラッパ状に開く特徴的な形状を呈すもので、体部の内外面に横位のミガキaが施される。口縁端部内面は緩く窪み断面形状は撮型をなす。淡橙褐色を呈す。大宰府では国分寺、宝満山など寺院関連遺跡周辺での出土例が知られる。

瓦

軒丸瓦(8) 鴻臚館式。瓦質焼成で、内面に布目痕が残る。

丸瓦(9) 凸面、側面ともに磨耗が著しく調整不明。凹面には模骨痕と粗い布目痕が残る。

弥生土器

甕(10、11) 10は甕の底部である。外面には縦方向の刷毛目調整が施されている。内面底部には指頭圧痕が残っている。11は甕のL字形の口縁部分である。口縁端部には縦方向の刻み目が入れられ、口縁部下には断面M字状突帯がヨコナデにより貼り付けられている。内外面ともに丹塗りである。

国松9SX094出土遺物 (図26、Pl7-3~5、CD写真72~75)

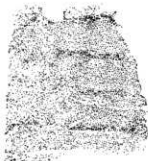
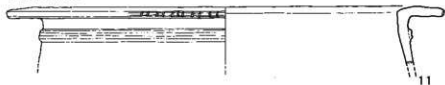
須恵器

蓋3(1、2) 1は口径14.7cmを測る。天井部は回転ヘラ削りである。天頂部分は欠損しているが、一部ヨコナデが残るつまみが付いていたと想定される。2は口縁部のみで、1に比べると器壁が薄い。端部が下方に折り返される3タイプに位置づけられる。

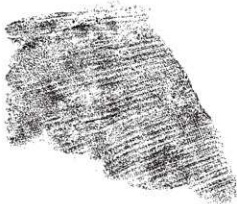
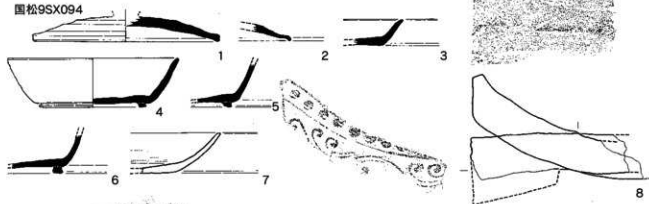
皿a(3) 口縁から底部にかけての破片である。口縁端部は外反し、底部はヘラ切りが残る。

坏c3(4~6) 4は口径13.5cm、器高3.9cm、底径8.4cmを測る。口縁端部はやや外反気味で、高台は外踏ん張りの形状をしている。5は底部のみの破片で、高台形状は4に類似し、やや外分張りの形

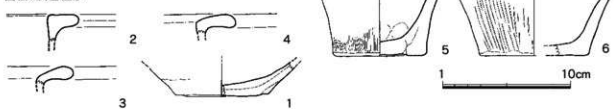
国松9SX093



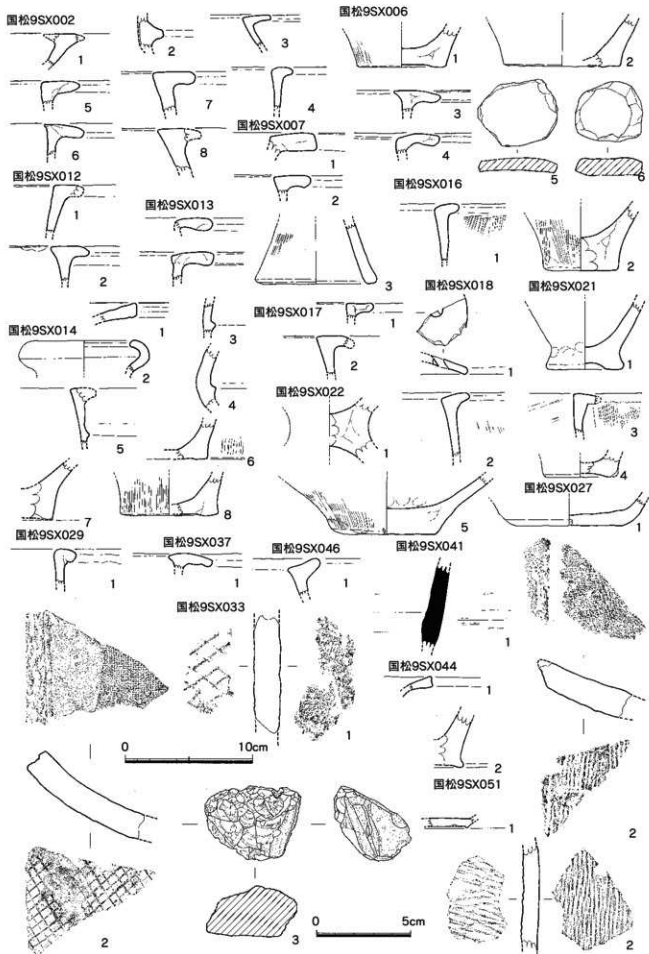
国松9SX094



国松9灰色粗砂



第26图 国分松本9次 河川跡・灰色粗砂層出土遺物実測図 (1/3)



第27図 国分松本9次 その他の遺構出土遺物実測図 (1/3)

状である。6も底部のみの破片である。高台形状が台形状を呈している。

土師器

坏d (7) 器高3.2cmを測る口縁から底部にかけての破片である。口縁端部はやや内湾する。外面は磨耗により調整不明だが、内面底部付近にミガキaが認められる。

瓦

軒平瓦 (8) 外区の凸鋸歯文がなく、珠文のみが認められる。内区には偏行唐草文が入る。焼成は良好で、瓦質である。軒部分は顎貼付け技法で、貼付け部分が欠損している。凸面は顎貼付け時のナデのみで、凹面には横骨痕とやや粗めの布目痕が残る。側面調整は垂直切り落とし後凹面側面取り調整B2bである。

平瓦 (9、10) 9は凸面に縄目叩きで、凹面は糸切り後やや粗めの布目痕が残る。10は凸面縄目叩きで、凹面にやや粗めの布目痕が残る。9、10ともに瓦質の焼成である。側面調整は垂直切り落とし後凹面側に幅広の面取り調整B3aである。

国松9灰色粗砂出土遺物 (図26、Pla7-6、CD写真76)

弥生土器

壺 (1) 底部のみの破片である。器面風化が著しく、調整等は不明である。須玖Ⅱ式。

甕 (2～6) 2～4は口縁部分である。いずれの個体も風化が著しいが、口縁成形のヨコナデが残る。須玖Ⅱ式。5・6は甕の底部である。4は底径5.2cmを測り、底面はナデ成形である。外面には縦方向の刷毛目調整で、内面底部付近には指頭圧痕が残る。須玖Ⅱ式。5は底径5.0cmを測り、底部は風化のため調整不明。外面には縦方向の刷毛目調整で、内面にはナデ調整が残されている。6はレンズ状の底部である。

国松9SX002出土遺物 (図27、Pla8-1、CD写真77)

弥生土器

高坏 (1) T字の口縁部分である。内外面ともにナデで仕上げている。胎土は非常に精良である。

壺 (2、3) 2は台形状突帯の一部である。3はL字の口縁部分である。内面は風化により調整は不明だが、外面は回転ナデで一部に丹塗りが残る。短頸壺。

甕 (4～8) 4～8は口縁部片である。4は外面の口縁端部にナデ調整が残る。須玖Ⅰ式。5～8は内外面ともに器面風化が著しく、調整などは不明である。須玖Ⅱ式。

国松9SX006出土遺物 (図27、Pla8-2、CD写真78)

弥生土器

甕 (1、2) 1、2は底部片である。1は底径7.0cmを測り、底面はナデ成形を施す。外面は風化が著しいが、若干縦方向の刷毛目調整が残る。内面はナデ調整である。2は底径9.2cmを測る。内外面ともに器壁風化が著しく、調整など不明である。須玖Ⅱ式。

国松9SX007出土遺物 (図27、Pla8-2、CD写真78)

弥生土器

高坏 (1) 口縁部分である。内外面ともに器面風化が著しく、調整などは不明である。胎土は非常に精良である。須玖Ⅰ式。

甕 (2～4) 2～4は口縁部分である。2、4は外面口縁部分にナデ調整が残る。3はT字の口縁部内外面ともにナデ調整を施す。

土製品

円盤状加工土製品 (5、6) 弥生土器の二次加工品である。5、6ともに風化が著しいが、ナデ調整が残る。

国松9SX012出土遺物 (図27、Pla8-2、CD写真78)

弥生土器

鉢(1) 口縁部だけの破片である。内外面の口縁部付近にナデ調整が残る。須玖Ⅱ式。

甕(2) 口縁部である。外面口縁部付近にナデ調整が残る。内面口縁部に黒色化した部分がある。須玖Ⅱ式。

国松9SX013出土遺物 (図27、Pla8-2、CD写真78)

弥生土器

甕(1、2) 口縁部である。口縁端部にナデ調整が残る。須玖Ⅱ式。

器台(3) 底部だけの破片である。底径8.0cmを測る。外面は縦方向の刷毛目、内面は上下方向のナデ調整している。

国松9SX014出土遺物 (図27、Pla8-3、CD写真79)

弥生土器

壺(1~4) 1、2は口縁端部だけの破片である。1は広口壺。口縁端部に沈線状のくぼみがある。内外面ともにナデ調整で、丹塗りを施す。胎土は精良である。2は袋状口縁で、外面は器面風化により調整不明である。内面にナデ調整が残る。胎土は精良である。3は頸部片である。突帯貼付けのナデ調整が残る。4は突帯のみの破片である。突帯周辺にわずかに丹塗りが残る。胎土は非常に精良である。

甕(5~8) 5は口縁部である。外面にナデ調整が残り、口縁下部に突帯がある。6~8は底部片である。6は外面に縦方向の刷毛目、外面にナデ調整を施す。胎土は精良である。7は内外面ともに器面風化が著しく、調整不明である。8は底径6.7cmを測る。外面に刷毛目調整を残す。大半のものが須玖Ⅱ式の範疇に取まるものである。

国松9SX016出土遺物 (図27、Pla8-3、CD写真79)

弥生土器

甕(1、2) 1は口縁部だけの破片である。外面の刷毛目調整が残る。2は底部片である。外面には刷毛目、内面にはナデ調整を施す。須玖Ⅰ式期中期前葉の所産か。

国松9SX017出土遺物 (図27、Pla8-3、CD写真79)

弥生土器

甕(1、2) 1・2は口縁部である。内面端部付近のナデ調整が残る。須玖Ⅱ式期中期中葉の所産か。

国松9SX018出土遺物 (図27、Pla8-3、CD写真79)

弥生土器

蓋(1) 無頭壺の蓋で口縁部だけの破片である。穿孔が一部残存し、胎土は精良である。器面は残っていないため、彩色の有無は不明。須玖Ⅱ式期中期中葉以降の所産。

国松9SX021出土遺物 (図27、Pla8-4、CD写真80)

弥生土器

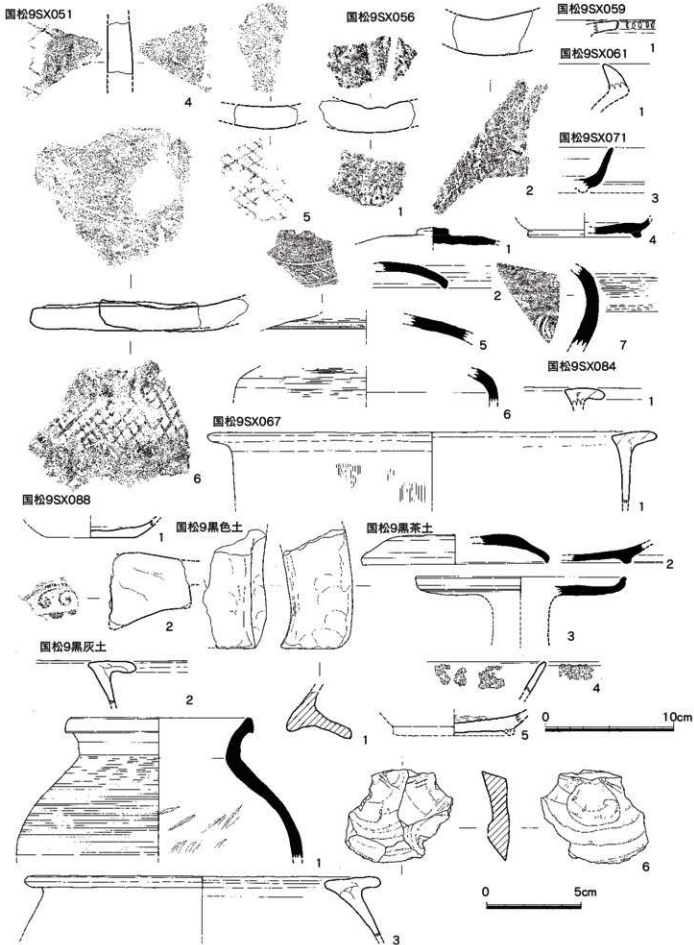
甕(1) 底径6.0cmを測る底部だけの破片である。底部には指頭圧痕があり上げ底である。須玖Ⅰ式期中期前葉の所産。

国松9SX022出土遺物 (図27、Pla8-4、CD写真80)

弥生土器

高坏(1) 脚部だけの破片である。坏内面が黒色化しており、脚部底部はナデが見られる。裾部の開きが上位からはじまり、須玖Ⅰ式期中期前葉の所産と見られる。

壺(5) 壺の底部である。内面には不定方向のナデと底部には指頭圧痕が認められる。外面は縦方向の



第28図 国分松本9次 その他の遺構出土遺物実測図2 (1/3)

刷毛目調整で、底部付近に煤が付着している。

甕（2～4）2、3は口縁部のみの破片である。2は内外面ともに磨耗が著しく、外面に若干の刷毛目調整が残る。3は内面に横方向の刷毛目、外面には縦方向の刷毛目調整が残る。4は底部のみの破片である。底部はやや厚手でナデで外底部を凹状に仕上げている。おしなべて須玖Ⅱ式期中期中葉以降の所産か。

国松9SX027出土遺物 (図27、Pla8-4、CD写真80)

弥生土器

壺（1）底部のみの破片である。調整等は不明。

国松9SX029出土遺物 (図27、Pla8-4、CD写真80)

朝鮮系無紋土器

甕（1）口縁のみの破片である。口縁端部を折り曲げて丸く取めている。端部形成のための指オサエが残る。内外面の調整は磨耗のため不明である。外面の一部に黒色化した部分が確認できる。市内でははじめての出土例である。須玖Ⅱ式期中期中葉以降の所産か。

国松9SX033出土遺物 (図27、Pla8-5、CD写真81)

瓦

平瓦（1、2）1は凸面が縦長斜格子目叩きである。格子目の線の太さにはばらつきのある特徴がある。凹面にはやや粗めの布目痕が残る。側面調整は分割後未調整（以後A1aと表記）である。2は凸面に大きな横長斜格子目である。

国松9SX037出土遺物 (図27、Pla8-5、CD写真81)

弥生土器

甕×高坏（1）内側に若干張り出す逆L字形を呈す、甕ないし高坏の口縁部分である。須玖Ⅱ式期中期中葉以降の所産。

国松9SX041出土遺物 (図27、Pla8-5、CD写真81)

須恵器

鉢b（1）体部のみの破片である。内面はヨコナデ、外面は回転ヘラケズリが確認できる。

瓦

平瓦（2）凸面が細目叩きで、凹面には細かな布目痕が残る。側面調整は破損と磨耗のため不明である。

国松9SX044出土遺物 (図27、Pla8-5、CD写真81)

弥生土器

壺（1）広口壺の口縁部片である。器壁の磨耗のため調整不明だが、内外面に朱が残る。胎土は砂粒を多く含む。須玖Ⅱ式期中期中葉以降の所産。

甕（2）底部のみの破片である。底部外縁が多少突出気味である。磨耗のため調整不明である。外面の一部に二次被熱のため白桃色化する。須玖Ⅱ式期中期中葉以降の所産。

国松9SX046出土遺物 (図27、Pla8-5、CD写真81)

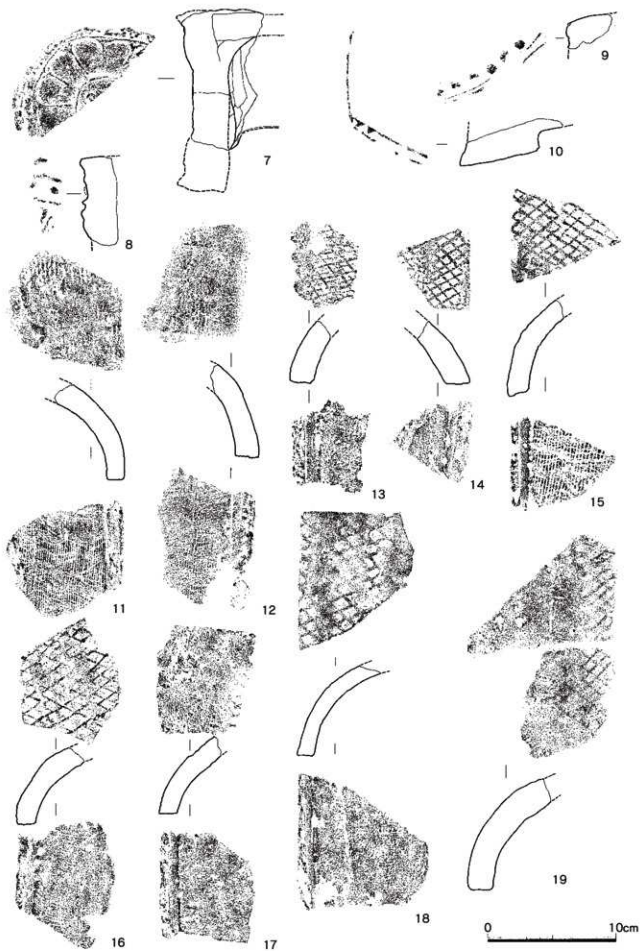
弥生土器

甕（1）内傾化する口縁部片である。外面に口縁端部調整のヨコナデが残る。須玖Ⅱ式期中期中後葉以降の所産か。

国松9SX051出土遺物 (図27・28、Pla8-6、CD写真82)

国産陶器

坏×皿（1）底部のみの破片である。内面見込み部分は軸カキ取りで、底部畳付には目跡が残る。軸調



第29図 国分松本9次 黒茶土出土遺物実測図 (1/3)

は光沢のあるくすんだ緑色で、胎土は黄白色できめ細かい。江戸後期の所産か。

須恵質土器

大甕(2) 体部片である。外面は縦方向の叩き目、内面は横方向の充て具痕跡が残る。表面が茶褐色化している。

石器

石核(3) 約5cm大の原石表皮が残る垂礫状の黒曜石を、ややフラットな面から一方向に剥出しようにしたもので、良好な剥片が取れず途中で断念されたものと見られる。剥離面の風化はさほど進行しておらず縄文後期以降の所産か。同時期の土器類が出土しておらず注目される。

瓦

平瓦(4~6) 4は凸面に大きな横長斜格子目叩きで、凹面は細かな布目痕を施す。5の凸面は横長斜格子目叩きで、凹面に粗い布目痕が残る。6は凸面に横長斜格子目叩きで、凹面は丁寧なナデ調整である。

国松9SX056出土遺物 (図28、Pla8-6、CD写真82)

瓦

平瓦(1、2) 1、2は凸面が縄目叩きで、凹面に模骨痕と布目痕が観察できる。2は厚さ2.9cmを測る。

国松9SX059出土遺物 (図28、Pla9-1、CD写真83)

弥生土器

甕(1) 口縁のみの破片である。端部に縦の刻目が入り、内外面に赤茶色の朱が残る。胎土は精良である。須玖Ⅱ式期中期中葉以降の所産。

国松9SX061出土遺物 (図28、Pla9-1、CD写真83)

弥生土器

壺(1) 袋状口縁端部の破片である。器壁の磨耗が著しいが、内面ヨコナデが残る。袋上部は「く」の字になると思われ、後期中葉以降の所産か。

国松9SX067出土遺物 (図28、Pla9-1、CD写真83)

弥生土器

甕(1) やや内側に突出するL字形口縁を持ち、口径35.4cmを測る口縁のみの破片である。内面、口縁端部の調整は磨耗により不明だが、外面に縦の刷毛目調整が残る。須玖Ⅱ式中期中葉の所産。

国松9SX071出土遺物 (図28、Pla9-1、CD写真83)

須恵器

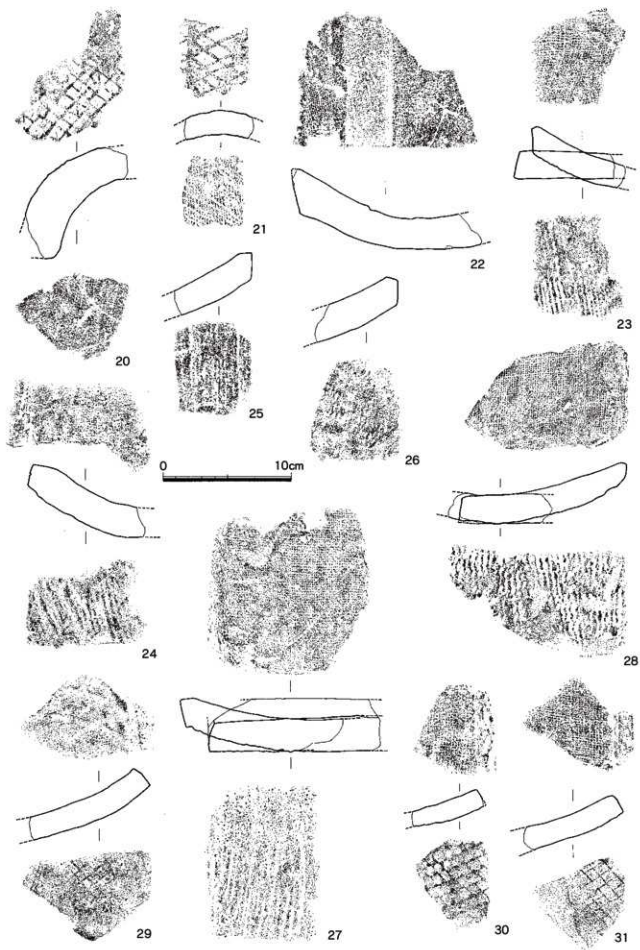
蓋c(1) 天井部片である。天井部は回転ヘラケズリで、やや中央が盛り上がったつまみがつく。

蓋c(3) 口縁から天井部にかけての破片である。回転ヘラケズリ後つまみ接合のためのヨコナデが観察できる。端部はあいまいに屈曲する。

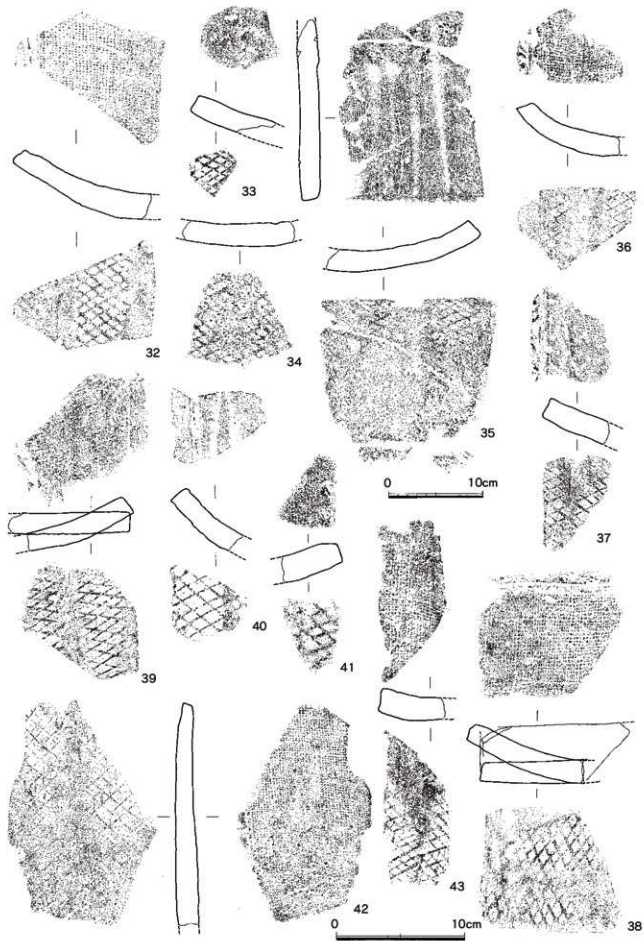
坏c(3、4) 3は推定口径6.0cmを測る口縁から体部にかけての破片である。体部下半に回転ヘラケズリがみられ、高台貼付けのナデが確認できる。4は底部片である。回転ヘラ切り後、丸みのある外踏ん張り状の高台がつく。

壺(5~7) 5、6は頸部~肩部のみの破片である。内面は回転ナデで、外面には掻目後同じ工具で押刻文を施す。胎土は硬質精良である。色調は内外面が青灰色で、断面中心が赤紫灰色を呈す特徴がある。7は肩部~体部にかけての破片である。内面にはナデと下半には同心円文当て具痕がある。外面には掻目後肩部から体部への変換部分で一本の沈線が巡り、体部下半には内面に対応した叩き痕が確認できる。5~7は調整や胎土の特徴から同一個体の可能性が高い。7世紀後半のものか。

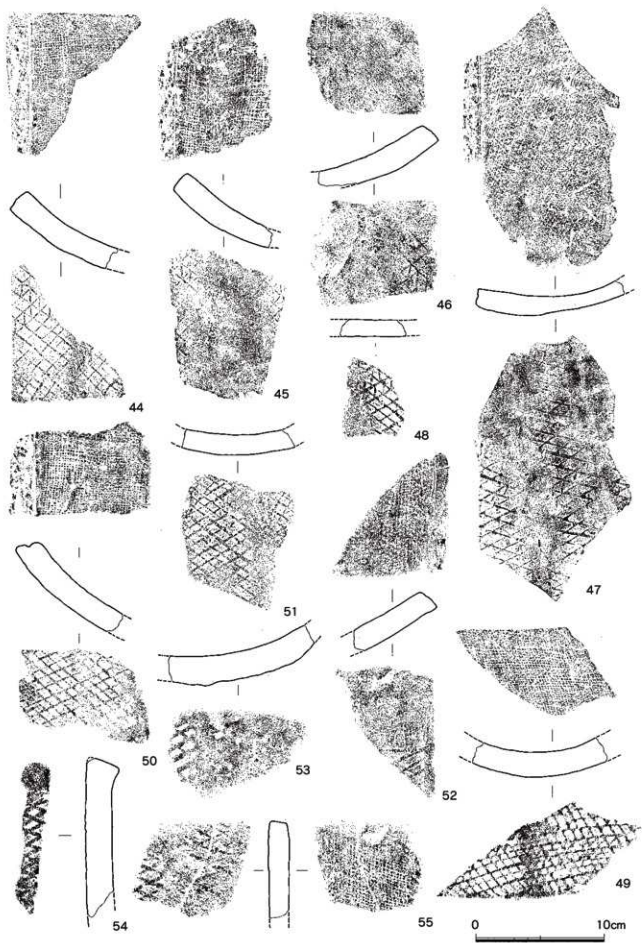
国松9SX084出土遺物 (図28、Pla9-1、CD写真83)



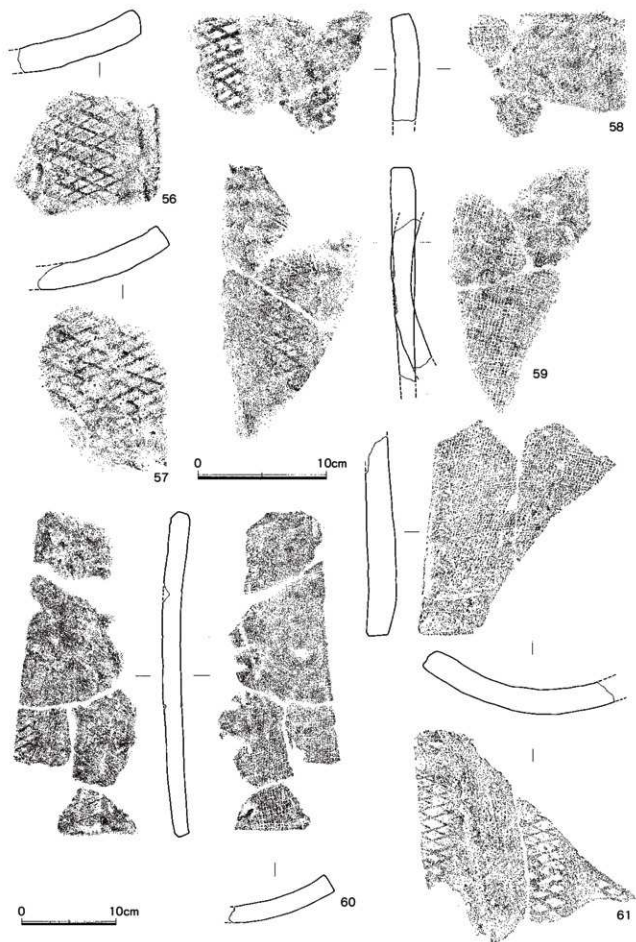
第30図 国分松本9次 黒茶土出土遺物実測図2 (1/3)



第31図 国分松本9次 黒茶土出土遺物実測図3 (1/3・1/4)



第32図 国分松本9次 黒茶土出土遺物実測図4 (1/3)



第33図 国分松本9次 黒茶土出土遺物実測図5 (1/3・1/4)

弥生土器

甕（1）やや内側に突出するL字形口縁部片である。外面に端部調整に伴うヨコナテが残る。須玖Ⅱ式期中期中葉以降の所産。

国松9SX088出土遺物（図28、Pla9-1・2、CD写真84）

土師器

坏d（1）底径7.0cmを測る底部のみの破片である。内外面ともに磨耗が著しいが、ミガキaがわずかに観察できる。底部は回転ヘラケズリである。

瓦

軒平瓦（2）軒部分のみの破片である。鋸歯文と扁形唐草文から老司Ⅱ式（九歴分類560）にあたる。軒部分は顎貼付けて、凹面に粗めの布目痕が残る。

国松9黒色土出土遺物（図28、Pla9-3、CD写真85）

土製品

竈（1）底部が残存している移動式竈の焚き口の破片である。底部を平らに調整し、黒色に煤けている。平らな粘土で底を付け、多くの指圧痕が観察できる。

国松9黒灰土出土遺物（図28、Pla9-3、CD写真85）

須恵器

壺（1）口径14.4cmを測る口縁から体部上半までの破片である。口縁端部は玉縁状で、外面には撞目が施される。内面には回転ヨコナテ後同心円状の当て具痕が残る。7世紀後半以降の所産か。

弥生土器

甕（2、3）やや内側に突出するL字形口縁部を持つ。2は内外面ともに回転ナテ調整がみられ、外面には煤が付着する。3は口径28.0cmを測る口縁部の破片である。内外面ともに回転ナテ調整である。須玖Ⅱ式。

国松9黒茶土出土遺物（図28～34、Pla9-4～10-6、CD写真86～94）

須恵器

蓋3（1）口径14.6cmを測る。天井部は回転ヘラケズリ調整で、胎土はやや軟質で精良。

坏c 3（2）底部のみの破片である。高台はやや外向きの台形状で、胎土は硬質精良である。

高坏（3）口径17.0cmを測る坏部のみの破片である。口縁端部はやや外反し、坏下半は回転ヘラケズリ調整である。このタイプとしては小型に属す。

土師器

坏（4）口縁端部のみの破片である。内外面に油煙のシミが付着している。

坏c（5）底部片である。内面にミガキaが観察できる。胎土は精良である。

石器

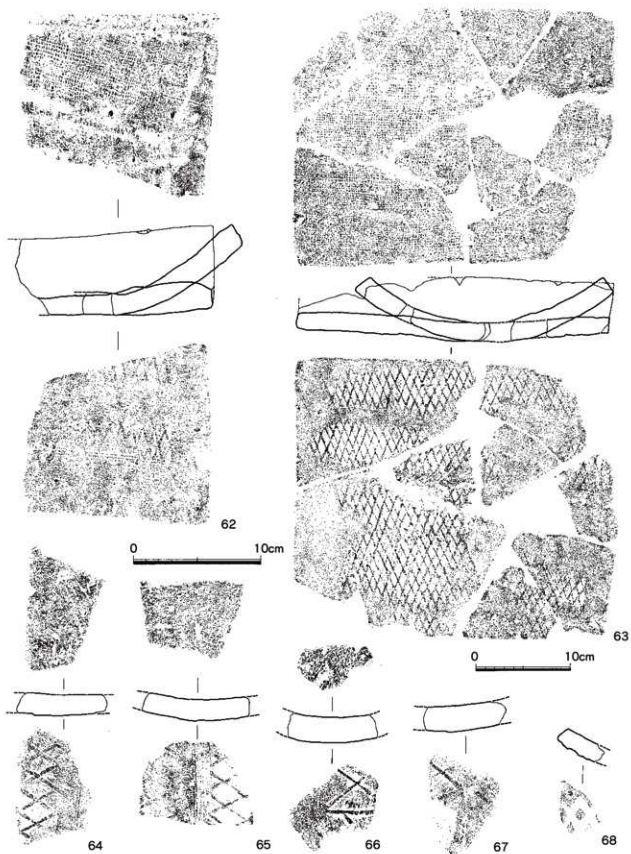
剥片（6）かなり風化が進行した輝石安山岩の横長剥片で、使用による顕著な微細剥離などは観察されない。縄文後期以降の所産か。

瓦

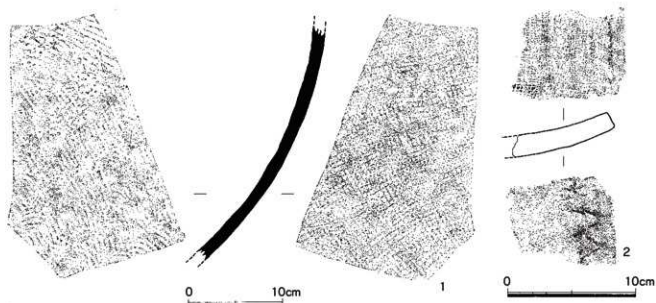
軒丸瓦（7、8）7は周縁、珠文帯、幅の広い単弁、中房となる配置の単弁系軒丸瓦で、九州歴史資料館分類の048タイプと見られる。やや焼のあまい須恵質。瓦当は厚手。8は鴻臚館系で焼成は瓦質。

軒平瓦（9、10）9は土師質で瓦当面上位の珠文帯、10は瓦質で下位の鋸歯文帯の小片である。

丸瓦（11～68）11、12は凸面が欄目叩きで、凹面には粗めの布目痕が残る。側面調整は分割後未調整（以後A1aと表記。『大宰府条坊跡X』1998参照）である。13は凸面が横長斜格子目叩きで、凹面は



第34图 国分松本9次 黒茶土出土遺物実測図6 (1/3・1/4)

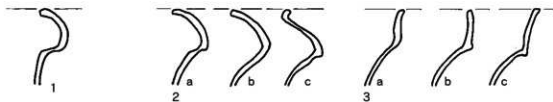


第35図 国分松本9次 表土出土遺物実測図 (1/3・1/4)

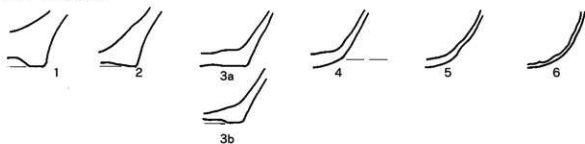
弥生土器 中～後期 臺口縁部分類



弥生土器 臺A (袋状口縁臺) 口縁部分類



弥生土器 臺底部分類



凡例

丁寧なナデ消しが施される。14、15は凸面がやや太めの横長斜格子目叩きである。14は凹面がやや細かな布目痕で、15は粗い布目痕が残る。16は凸面が細めの横長斜格子目叩きである。格子目が均等でなく、格子を構成する線が途中で異方向に入れられる特徴が見られる。平瓦50、51に類似する。凹面はやや細かな布目痕である。17は凸面が細めの横長斜格子目である。凹面は丁寧なナデ消しが施される。18は凸面が太めの横長斜格子目で、凹面にはやや細かな布目痕が残る。13～18の側面調整はすべてA1aである。19は凸面が横長斜格子目叩きである。凹面と側面調整は磨耗が著しく確認できない。20は凸面が横長斜格子目で、格子目全体に縦方向の追刻があるのが特徴である。凹面は糸切り痕を遺すやや細かな布目痕である。側面調整は破損のため確認できない。厚み3.3cmを測る。21の凸面は太めの横長斜格子目で、格子目の大きさにばらつきのある特徴がある。凹面には粗い布目痕が残る。

平瓦 (22～68) 22は凹面に若干の縄目叩き目、凸面にはやや粗めの布目痕と模骨痕が確認できた。

23～28は凹面に縄目叩きで、凸面に布目痕が残る。22～27の側面調整は垂直切り落とし後ケズリ調整(B2b)である。29は凹面に横長斜格子目、凸面にやや粗めの布目痕が残る。30は凹面にややつぶれ気味の横長斜格子目で、凸面にやや粗めの布目痕が残る。31は細めの横長斜格子目で、凹面にはやや粗めの布目痕が残る。32、34は凹面がやや太めの横長斜格子目である。凸面はやや粗めの布目痕が残る。29～32の側面調整はA1aである。33は凹面にやや太めの横長斜格子目である。側面調整はきれいで平面的なケズリ調整A2aである。35は凹面に横長斜格子目、凸面には粗い布目痕と模骨痕が残る。36は凹面が細めの横長斜格子目である。凸面はやや粗めの布目痕が残る。37、38はやや太めの横長斜格子目で目の大きさにばらつきがある特徴がある。35～38の側面調整はA1aである。39は凹面が横長斜格子目で凸面はやや粗めの布目痕が残る。側面調整はきれいで平面的なケズリ調整A2aである。40は凹面に線の太さにばらつきのある横長斜格子目である。凸面には布目痕と粘土継ぎ足し痕が残る。41の側面調整は平面的できれいなケズリ後凹面側に向取り調整A2bである。42～49は凹面に一部の格子目に縦方向の追刻が特徴の横長斜格子目である。凸面はやや粗めの布目痕が残る。側面調整はA1aである。50、51は凹面が横長斜格子目である。格子目が均等でない。追刻ではなく、格子を構成する線が途中で異方向に削られる特徴が見られる。丸瓦16に類似する。凹面には粗い布目痕が残り、側面調整はA1aである。52は凹面が横長斜格子目で、凸面にやや粗めの布目痕が残る。側面調整はA2aである。53は凹面に太めの横長斜格子目で、凸面に若干布目痕が残る。54、55は凹面にやや太めの横長斜格子目で目の大きさにばらつきのある特徴がある。56は凹面が横長斜格子目である。格子を構成する左上がりの線が太い特徴があり、柁目板の木目が確認できる。側面調整はA2bである。57は磨耗しているが、格子目の特徴が56に類似している。58～64は凹面が横長斜格子目である。線の太さにばらつきがあり、ヨコが長い扁平な格子目が特徴である。凹面にはやや粗めの布目痕が残る。側面調整は61、63がA1aで、60、62はA2aである。64、65、67は凸面が大きな横長斜格子目である。線が太く、ばらつきがある。凹面にはやや細かな布目痕がある。側面調整は不明。66は凸面に大きな横長格子目で、鉤状文と思われる部分が確認できる。凸面は粗い布目痕である。68は凹面が縦長格子目で、格子目がリバースしているのが特徴である。凹面の布目痕は磨耗のため不明である。側面調整はA2aである。

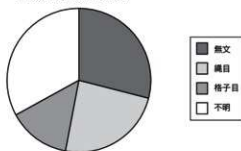
国松9表土出土遺物 (図35、Plal0-6、CD写真94)

須恵器

甕 (1) 大型甕の胴部中位以下の破片で、外面の格子目叩きに対応した内面の同心円文が特徴的で、下位で方向が平行叩きから同心円叩きに変化している。焼成は硬質で時期は古墳時代後期から奈良時代までが想定される。

種別	質	叩き	破片数	重量 (g)
平瓦	須恵質	無文	2	260
	土師質	無文	18	1500
	瓦質	無文	106	14200
丸瓦	須恵質	無文	8	400
	土師質	無文	24	1950
	瓦質	無文	70	6960
平瓦	須恵質	縄目	6	800
	土師質	縄目	38	4380
	瓦質	縄目	104	15850
丸瓦	土師質	縄目	4	590
	瓦質	縄目	38	2980
	須恵質	格子目	25	4770
平瓦	土師質	格子目	4	620
	瓦質	格子目	56	13100
	須恵質	格子目	12	910
丸瓦	瓦質	格子目	11	1700
	須恵質	不明	11	390
	土師質	不明	95	3530
瓦当	瓦質	不明	153	6220
			4	920

国分松9次瓦出土傾向 (破片数)



種別	叩き	破片数	重量 (g)
平瓦	無文	126	15960
平瓦	縄目	148	21030
平瓦	格子目	85	18490
丸瓦	無文	102	9310
丸瓦	縄目	42	3570
丸瓦	格子目	23	2610

国分松9次瓦出土傾向 (重量)

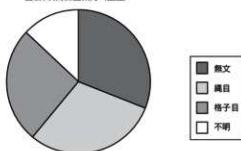


表4 国分松本9次 黒茶土出土瓦計測表

瓦

平瓦(2) 凹面は大きな横長斜格子目で、凸面にはやや粗い布目痕が残る。側面調整はA2aである。

4. 小結

当該地は南西から北東方向に全長約400m区間に渡って調査を行った。調査は南西から北東に向かって進行し、弥生時代中期中葉の遺物が出土する柱穴が確認された。28区では筑前国分尼寺の前面道路側溝との関連が想定される溝9SD043が検出され、本調査区まで前面道路が延伸されていたことが想定される。さらに瓦が大量に出土した黒茶土は国分松本遺跡第3次調査で検出されている3SX001との関連が指摘される。国分松本地区は国分松本第8次調査では瓦窯の灰原も検出されており、この瓦を消費した筑前国分寺や国分尼寺の推定域が至近であり注目される。黒茶土で出土した瓦は出土状況から本調査では遺構全体の一部であれ一定の指標になるのではと想定し、傾向を抽出した。結果、出土破片・重量傾向では無紋瓦がもっとも多く、縄目瓦、格子目瓦の順であることが判明した。さらに、格子目瓦についてはその格子パターンの検証から、少量ながら横長斜格子でサイズが大きく、鴻臚館跡出土例で類似する特徴をもつ格子目が確認できた。このことから黒茶土で出土した瓦の傾向としては無文・縄目を主体とする8c後半～11c中頃までの時期が想定される。この瓦群の存在は少なくとも瓦を消費する主体施設が国分松本地区の至近に存在したと考えられる。

【参考文献】

- 太宰府町教育委員会（1981）『筑前国分尼寺跡・陣ノ尾遺跡』太宰府町の文化財第4集
太宰府市教育委員会（1991）『筑前国分尼寺跡 II』太宰府市の文化財第16集
太宰府市教育委員会（1999）『筑前国分寺跡 II』太宰府市の文化財第40集
太宰府市教育委員会（2004）『太宰府・国分地区遺跡群1』太宰府市の文化財73集
太宰府市教育委員会（2006）『宝満山遺跡群Ⅳ』太宰府市の文化財79集
大脇深（1991）「研究ノート 丸瓦の製作技法」『研究論集Ⅸ』奈良国立文化財研究所学報第49冊

S番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	備考【前後関係】	時期	地区
2		たまり	暗灰色土		弥生中期～	1,2区
3		溝	暗灰色土		古墳～	3区
4		溝	茶褐色土		弥生中期前半	4区
6		溝	暗灰色土	3-6-4	弥生中期中葉	3,4区
7		溝	暗灰色土	7-8	弥生中期中葉	4,5区
8		P i t	暗灰色土		弥生中期中葉	5区
9		P i t	黄褐色土			6区
11		溝	灰色粗砂			9区
12		P i t	黒色土		弥生中期中葉	9区
13		P i t	黒色土	13-11	弥生中期中葉	9区
14		P i t	黒色土		弥生中期中葉	10区
16		P i t	黒色土		弥生中期前半	11区
17		P i t	黒色土		弥生中期中葉	11区
18		P i t	黒色土	18-16,17	弥生中期	11区
19		P i t	灰色土	19-17	弥生中期中葉	11区
21		P i t	黒色土		弥生中期	12区
22		P i t	黒色土		弥生中期中葉	12区
23		P i t	黒色土		弥生中期中葉	12区
24		P i t	黒色土		弥生中期	12区
26		自然湧露	灰色粗砂			13区
27		P i t	黒色土		弥生中期	14区
28		P i t	黒色土		弥生中期	14区
29		P i t	黒色土		弥生中期	15区
31		P i t	黒色土		弥生中期	16区
32		P i t	灰色土		8c～	28区
33		溝ち込み	茶色砂		9c～	28区
34		P i t	黒色土		弥生?	28区
36		P i t	黒色土		弥生?	28区
37		P i t	黒色土		弥生中期	27区
38		P i t	黒色土		弥生?	27区
39		P i t	黒色土		8c～	28区
41		P i t	暗灰色土		8c～	28区
42		たまり	灰色土	42-41,44,48	弥生中期～	28区
43	S D043	溝	灰色土		9c～	28区
44		P i t	暗灰色土		弥生中期～	28区
46		P i t	茶色土		弥生中期～	27区
47		P i t	黒色土	47-39,46	弥生	27区
48		P i t	暗灰色土		弥生中期	28区
49		溝ち込み	灰色土		現代	29区
51		溝ち込み	灰色土		13c 後半～	29区
52		P i t	灰色土			31区
53		P i t	茶褐色砂		弥生～	31区
54	SD054	溝	灰色砂	54-56	9c～	49区
56		溝	灰白色砂		8c～	49区
57		P i t	暗灰色土		弥生～	64区
58		P i t	暗灰色土		弥生中期～	66区
59		溝状	灰色土		弥生中期～	66区
61		P i t	暗灰色土		弥生後半～	65区
62		P i t	暗灰色土		弥生～	64区
63		P i t	暗灰色土			63区
64		P i t	暗灰色土		弥生～	63区
66		P i t	暗灰色土		弥生～	64区
67		P i t	黒色土		弥生中期中葉	68区
68		P i t	黒色土		弥生～	70区
69		P i t	黒色土		弥生～	70区
71		溝	灰色砂		8c 前～	71区
72		たまり	黒色土		弥生中期～	70区
73		P i t	茶色土		弥生～	67区
74		P i t	黒色土		弥生～	67区
76		P i t	黒色土		弥生中期～	67区
77		P i t	黒色土		弥生～	67区
78		P i t	黒色土		弥生～	67区
79		P i t	黒色土		弥生～	68区
81		P i t	黒色土		弥生中期～	75区
82		P i t	黒色土		弥生～	75区
83		P i t	黒色土		弥生	75区
84		P i t	黒色土		弥生中期中葉	76区
86		P i t	黒色土			89区
87	S D087	溝	黒色土		8c 後半	91区
88		P i t	暗灰色土		8c 中頃～	93区
89	S D089	溝	灰色粗砂		8c～	93,94区
91	S D091	溝	茶褐色土		8c～	99,100区
92	S D092	溝	淡茶褐色粗砂		8c 後半～	102～107区
93	S X093	旧河川	淡茶褐色砂礫		8c 後半～	117区
94	S X094	旧河川	赤茶褐色砂礫		8c 後半～	119～123区

表5 国分松本9次 遺構番号一覧

S-2	弥生土器 甕1a 甕2a 壺 高环a×壺1a	S-28	弥生土器 壺(須久式?)
S-3	須恵器 坏 坏×皿 弥生土器 後期:壺・甕底3b 甕底2 甕口3 甕口1	S-29	弥生土器 破片 その他 朝鮮系無文土器:甕
S-4	弥生土器 甕底2 甕2(丹)	S-31	弥生土器 壺×高环
S-6	弥生土器 甕底3a 甕底3b 高环a×鉢 甕底2	S-32	瓦 類 平瓦 弥生土器 壺
S-7	弥生土器 大甕蓋 甕口5 甕口4 土製品 円盤状土製品	S-33	須恵器 甕 瓦 類 平瓦(罫目I)(2) 平瓦(格子IA)(1) 平瓦(格子Ic)(1) 弥生土器 甕3 甕(中型)
S-8	弥生土器 甕口4 高环a	S-34	弥生土器 破片
S-12	弥生土器 甕口4 高环a(丹)	S-36	弥生土器 破片?
S-13	弥生土器 器台 甕口4 高环a 甕口5?	S-37	弥生土器 高环a
S-14	弥生土器 壺4 壺1 甕底2 甕2(丹) 甕口5 甕底1	S-38	弥生土器 破片?
S-16	弥生土器 甕底2 甕口5	S-39	弥生土器 破片
S-17	弥生土器 甕口5 甕2(丹)	S-41	瓦 類 平瓦(罫目I)(I) 弥生土器 壺1
S-18	弥生土器 蓋2 甕	S-42	弥生土器 壺(須久Ⅱ~)
S-19	弥生土器 甕口5	S-43	瓦 類 丸瓦(格子Ic)(1) 丸瓦(無文)(1) 弥生土器 破片
S-21	弥生土器 甕(未分類) 高环	S-44	弥生土器 甕2a
S-22	弥生土器 壺底 甕口2 甕底1 甕底3a	S-46	弥生土器 甕口5
S-23	弥生土器 壺4×5 甕口5	S-47	弥生土器 破片
S-24	弥生土器 器台 壺?		
S-27	弥生土器 壺(須久式?)		

表6 国分松本9次 出土遺物一覧1

S-48		弥生土器 壺?	
S-49			
瓦 類	平瓦 (欄目1) 丸瓦 (無文) 平瓦 (無文)		
国産陶器	土管 (現代) 桶 (江戸~)		
肥前系陶磁 器	鉢 (江戸)		
S-51			
須恵系土器	甕 供膳鉢		
瓦 類	平瓦 (欄目1 c) (3) 丸瓦 (1)		
国産陶器	桶×甕×鉢 (内底輪はぎ、瀬戸内系縁輪)		
弥生土器	甕 壺1 a		
S-53			
弥生土器	壺?		
S-54			
瓦 類	丸瓦 (格子1 c) (1) 破片 (1)		
S-56			
瓦 類	平瓦 (欄目1) (2) 丸瓦 (欄目1) (1) 平瓦 (不明) (5) 丸瓦 (不明) (2) 破片 (5)		
S-57			
弥生土器	破片		
S-58			
弥生土器	壺1 甕1 壺1 a? 高坏 a × 甕2 a		
S-59			
弥生土器	甕2 a × 高坏 a		
S-61			
弥生土器	高坏 a 後期前半; 壺A2 a		
S-62			
弥生土器	破片?		
S-64			
弥生土器	甕		
S-66			
弥生土器	破片		
S-67			
弥生土器	甕口5		
S-68			
弥生土器	破片		
S-69			
弥生土器	破片		
S-71			
須 恵 器	蓋 c 坏 c 3 長頸壺(丸脚) 蓋3 甕 壺 b × 鉢 b		
土 師 器	甕		
瓦 類	平瓦 (無文) (1)		
弥生土器	甕1 壺 高坏 a		
そ の 他	古式土師器; 甕		
S-72			
弥生土器	甕 a2 甕1		
S-73			
弥生土器	破片		
S-74			
弥生土器	破片		
S-76			
弥生土器	甕2?		
S-77			
弥生土器	破片		
S-78			
弥生土器	支脚?		
S-79			
弥生土器	破片		
S-81			
弥生土器	胡台		
S-82			
弥生土器	甕		
S-83			
弥生土器	壺?		
S-84			
弥生土器	甕口5		
S-87			
須 恵 器	坏 c 3 坏		
土 師 器	甕?		
瓦 類	平瓦 (欄目1) (3) 丸瓦 (欄目1) (1) 平瓦 (不明) (1)		
弥生土器	破片		
S-88			
土 師 器	坏 d		
瓦 類	軒平瓦 (鴻巣館式) (1) 丸瓦 (1)		
S-89			
土 師 器	破片?		
瓦 類	丸瓦 (無文) (1)		
S-91			
瓦 類	平瓦 (欄目1) (1) 丸瓦(不明) (1)		
弥生土器	破片?		

表6 国分松本9次 出土遺物一覽2

S-92		72区表土	
土 師 器	椀 c 甕	須 恵 器	甕
瓦 類	平瓦 (罫目 I) (1) 平瓦 (無文) (1) 丸瓦 (無文) (1)	瓦 類	丸瓦 (無文) (1)
弥生土器	甕口4~6	弥生土器	甕口5
S-93		75区表土	
須 恵 器	坏 c3 壺蓋 (未分類) 甕 (中型) 壺 a	瓦 類	丸瓦 (格子1c)
土 師 器	甕 鉢	弥生土器	甕
瓦 類	軒平瓦 (陶胎簡式) (1) 丸瓦 (罫目 I) (1) 平瓦 (罫目 I) (1)	76区表土	
弥生土器	甕口5 甕2a	弥生土器	甕口5
S-94		138区表土	
須 恵 器	坏 c3 蓋 c3 坏 a2	土 師 器	大甕
瓦 類	軒平瓦 (陶胎簡式) (2) 平瓦 (罫目 I) (4)	瓦 類	丸瓦 (無文) (2) 平瓦 (罫目 I) (2) 平瓦 (無文) (1)
28区表土		表土	
弥生土器	甕1	須 恵 器	壺
29区表土		瓦 類	平瓦 (格子2c) (1) 平瓦 (不明) (1)
須 恵 器	壺	肥前系陶 磁 器	染付・大皿
土 師 器	把手	弥生土器	甕口5
瓦 類	平瓦 (無文) (1)	灰色砂 (49区)	
弥生土器	高坏 a 甕2a 蓋 甕口5	瓦 類	平瓦 (無文) (10) 平瓦 (不明) (5) 丸瓦 (無文) (2) 平瓦 (罫目 I) (2) 平瓦 (反転格子1c 4) (1)
31区表土		弥生土器	甕1?
弥生土器	破片?	灰色粗砂 (53区)	
63区表土		弥生土器	甕口5
弥生土器	破片	黒灰土 (85、86区)	
64区表土		須 恵 器	小甕
弥生土器	破片	土 師 器	甕 a
66区表土		弥生土器	甕 支脚 甕口4 甕口5
瓦 類	丸瓦 (罫目 I) (1) 丸瓦 (格子1c 少) (2) 丸瓦 (格子1c) (1) 平瓦 (不明) (2)	茶褐土 (75、76区)	
弥生土器	破片	弥生土器	甕2 甕口5 壺
67区表土		黒色土(91区)	
瓦 類	平瓦 (無文) (1)	土 師 器	移動式竈
弥生土器	破片	瓦 類	平瓦 (罫目 I) (16) 破片 (7) 丸瓦 (2)
68区表土		弥生土器	破片
瓦 類	丸瓦 (無文) (2) 平瓦 (格子1c) (2)	69区表土	
弥生土器	甕口5	瓦 類	平瓦? (不明) (1)
70区表土		70区表土	
弥生土器	壺4 甕台?	弥生土器	
71区表土		71区表土	
須 恵 器	壺	須 恵 器	壺
土 師 器	把手	土 師 器	把手
弥生土器	甕口5	弥生土器	甕口5

表6 国分松本9次 出土遺物一覽3

(2) 国分松本遺跡第10次調査

1、調査に至る経過

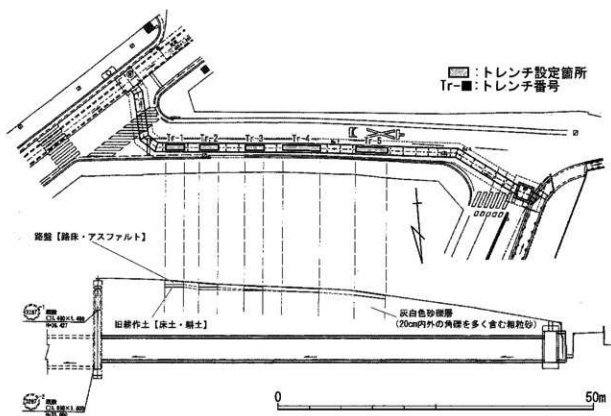
調査地は、太宰府市国分2丁目1356番地、現在道路として使用されており、平成15年7月19日に集中豪雨により被災した国分地区の災害対策として計画された陣ノ尾雨水幹線工事に伴う埋蔵文化財記録保存調査を実施した。平成18年度事業計画では、市道田中-松本線から太宰府市立国分小学校へ分岐した箇所から陣ノ尾川までの約70mの施工で、施工箇所周辺では、太宰府市教委より筑前国分尼寺跡第1次・10・14次調査が実施され、弥生期から平安中期までの遺構が確認されてきている（太宰府町教委、1981。太宰府市教委、1991・1999）。工事施工箇所では、奈良後期埋没の南北溝の延伸部分か確認される可能性が考えられた。開発対象面積は、295.2m²、経緯度は、北緯33° 31' 15"、東経130° 30' 16"に位置し、調査面積は、18m²を測る。調査は、立会調査も含め平成19年1月22日から同年3月19日まで実施し、調査は、中島恒次郎が担当した。

2、基本土層 (Pla11-1~12-6、CD写真40~51)

現状で道路として使用されており、路盤厚0.3m、その下に暗灰色土ならびに黄色土が0.2m堆積し、遺物を包含し0.2cm内外の角礫を多く含む灰白色砂層が厚く堆積し、層基盤面まで調査し得ていない。周辺調査成果を加味すると、河川氾濫に伴う堆積層と考えられ、層相から筑前国分寺跡第26次調査で確認した鎌倉期を下限とする河川堆積層の一部とも考えられる。

3、遺構 (図36)

前項に記述したように、瓦破片を極少量含む砂礫層のみの確認で、その下に遺構は確認できなかった。堆積土の状況は、トレンチ1からトレンチ3までは、旧耕作土（床土ならびに耕土）が0.35m～



第36図 国分松本10次 トレンチ設定位置・土層略測図 (1/600)



**第37図 国分
松本10次
灰白色砂出土
遺物実測図
(1/5)**

0.05mほど確認できたが、トレンチ4・5に関しては地形の関係から欠失していた。

4、遺物 (図37)

砂礫層から出土したもので、瓦である。

平瓦 (1) 凸面に粗めの縄叩き痕跡をとどめ、側面処理が観察できる1は、大脳分類による3a×bに該当するものと考えられる (大脳, 1991)。

5、小結

当該地は、筑前国分寺跡西外郭施設から筑前国分尼寺跡東外郭施設までの約1/3の位置にあり、既に筑前国分尼寺跡第1次・第10次調査にて確認している南北溝 (尼1SD001・尼10SD001・002・014) が、土地を区画する境界溝と考えられる。この溝の南延長箇所には現在も南北道路があり、国分寺と国分尼寺の間に区画された土地があった可能性がでてきた。周辺における今の地割にも東西南北の地割りが水田畦畔として残っている。国分寺ならびに国分尼寺への進入道路は、国分松本遺跡第6次調査にて確認されており、ほぼ東西方向の道路走向を有している。尼1SD001ならびに尼10SD001・002・014は、いずれも埋没時期が奈良後期に位置しており、溝開削時期を明らかにし難いものの、筑前国分寺ならびに国分尼寺の施工時期に周辺環境整備事業として行われていると考えるほうが蓋然性は高い。このような周辺調査成果から、尼1SD001の北側延長部分の確認および、河川氾濫痕跡の範囲確認を目的として実施した。結果として尼1SD001の北側延長部分は確認できず、河川氾濫痕跡が今次調査区まで広がっていることが確認できた。

【参考文献】

- 太宰府町教育委員会 (1981) 『筑前国分尼寺跡・陣ノ尾遺跡』太宰府市の文化財第4集
 太宰府市教育委員会 (1991) 『筑前国分尼寺跡 II』太宰府市の文化財第16集
 太宰府市教育委員会 (1999) 『筑前国分寺跡 II』太宰府市の文化財第40集
 大脳 潔 (1991) 「研究ノート 丸瓦の製作技法」『研究論集IX』奈良国立文化財研究所学報第49冊

灰白色砂	
瓦	型 平瓦 (縄叩)

表7 国分松本10次 出土遺物一覧

写 真 图 版



Pla1-1 国松9 3区完掘状況 (南から)



Pla1-2 国松9 4区完掘状況 (南から)



Pla1-3 国松9 5区完掘状況 (南から)



Pla1-4 国松9 5区完掘状況 (東から)



Pla1-5 国松9 6区完掘状況 (南から)



Pla1-6 国松9 7区完掘状況 (南から)



Pla2-1 国松9 9区完掘状況 (南から)



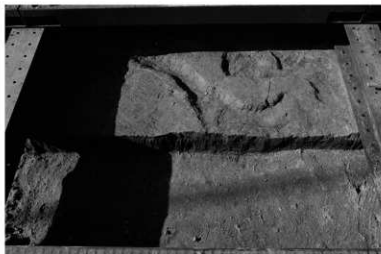
Pla2-2 国松9 10区完掘状況 (南から)



Pla2-3 国松9 11区完掘状況 (南から)



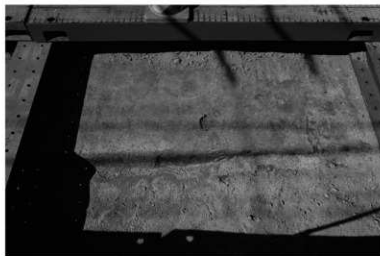
Pla2-4 国松9 12区完掘状況 (南から)



Pla2-5 国松9 13区完掘状況 (南から)



Pla2-6 国松9 15区完掘状況 (南から)



Pla3-1 国松9 16区完掘状況 (南から)



Pla3-2 国松9 23区土層断面 (南から)



Pla3-3 国松9 27区完掘状況 (南から)



Pla3-4 国松9 28区完掘状況 (南から)



Pla3-5 国松9 31区完掘状況 (南から)



Pla3-6 国松9 49区検出状況 (南から)



Pla4-1 国松9 49区完掘状況 (南東から)



Pla4-2 国松9 64区検出状況 (南から)



Pla4-3 国松9 64区完掘状況 (南から)



Pla4-4 国松9 65区検出状況 (南から)



Pla4-5 国松9 65区完掘状況 (南から)



Pla4-6 国松9 66区完掘状況 (南から)



Pla5-1 国松9 67区完掘状況 (南から)



Pla5-2 国松9 68区検出状況 (西から)



Pla5-3 国松9 68区完掘状況 (南から)



Pla5-4 国松9 69区完掘状況 (南から)



Pla5-5 国松9 71区完掘状況 (南から)



Pla5-6 国松9 72・73区完掘状況 (南から)



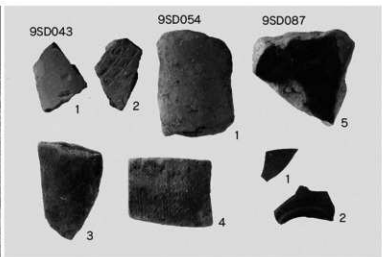
Pla6-1 国松9 76区完掘状況 (南から)



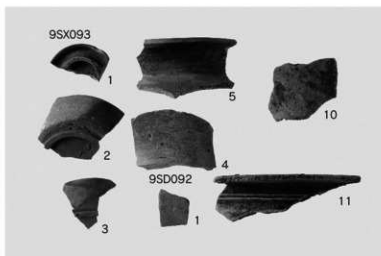
Pla6-2 国松9 77区完掘状況 (南から)



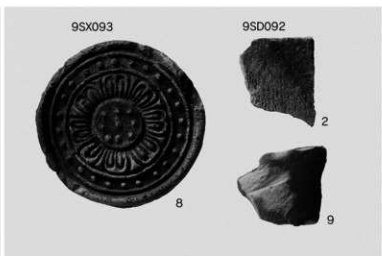
Pla6-3 国松9SX012土層断面 (南から)



Pla6-4 国松9SD043・054・087出土遺物



Pla6-5 国松9SD092、9SX093出土遺物



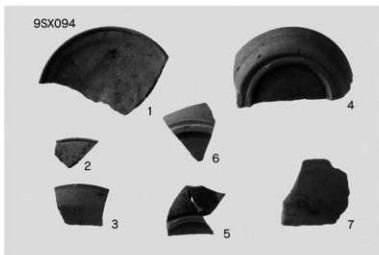
Pla6-6 国松9SD092、9SX093出土遺物



Pla7-1 国松9SX093出土遺物



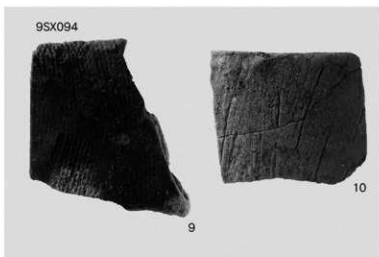
Pla7-2 国松9SX093出土遺物



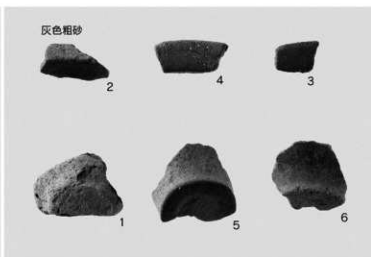
Pla7-3 国松9SX094出土遺物



Pla7-4 国松9SX094出土遺物

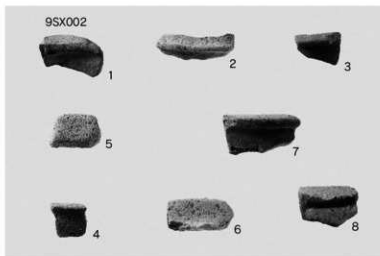


Pla7-5 国松9SX094出土遺物

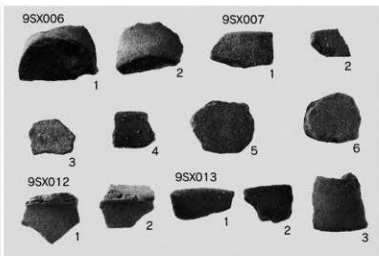


Pla7-6 国松9灰色粗砂出土遺物

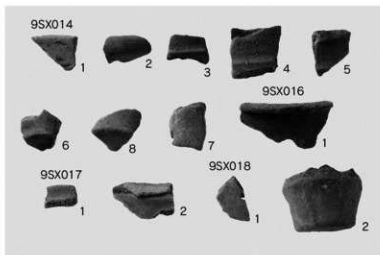
国松9次



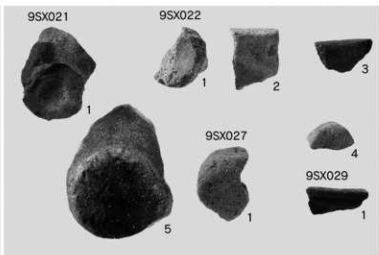
Pla8-1 国松9SX002出土遺物



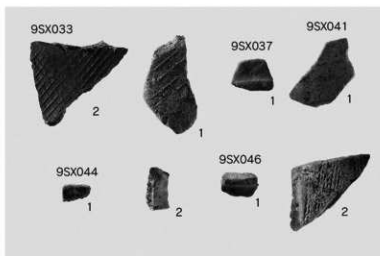
Pla8-2 国松9SX006・007・012・013出土遺物



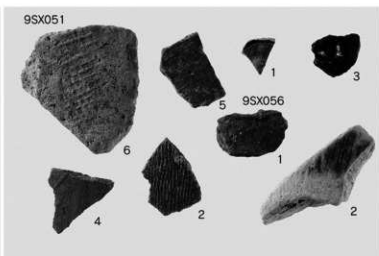
Pla8-3 国松9SX014・016・017・018出土遺物



Pla8-4 国松9SX021・022・027・029出土遺物

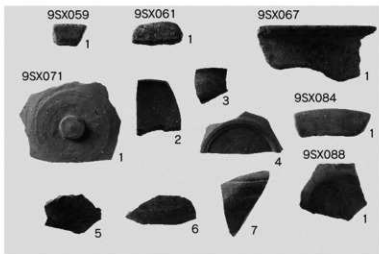


Pla8-5 国松9SX033・037・041・044・046出土遺物

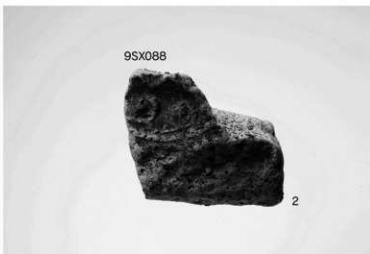


Pla8-6 国松9SX051・056出土遺物

国松9次



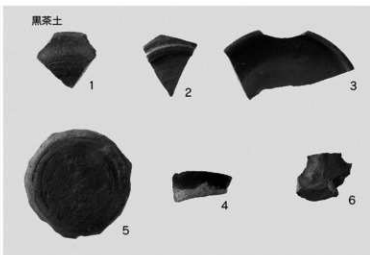
Pla9-1 国松9SX059・061・067・071・084・088出土遺物



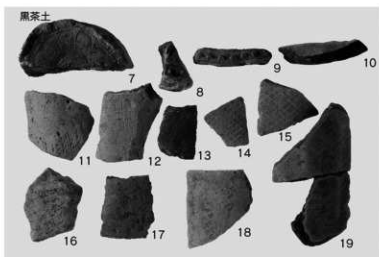
Pla9-2 国松9SX088出土遺物



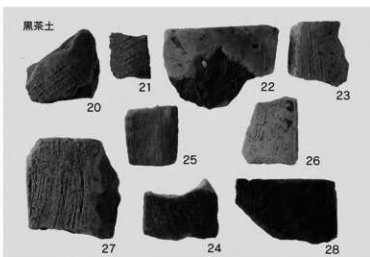
Pla9-3 国松9黒色土、黒灰土出土遺物



Pla9-4 国松9黒茶土出土遺物

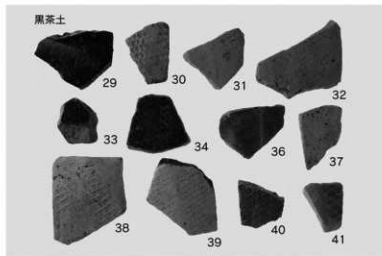


Pla9-5 国松9黒茶土出土遺物

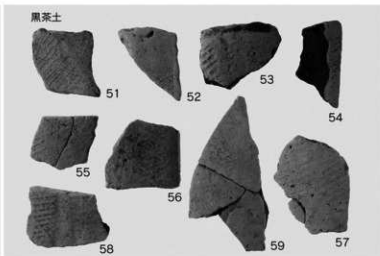


Pla9-6 国松9黒茶土出土遺物

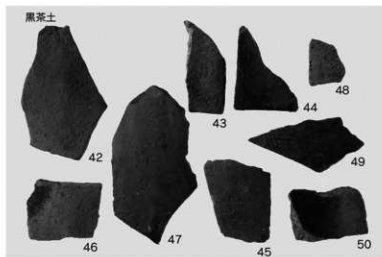
国松9次



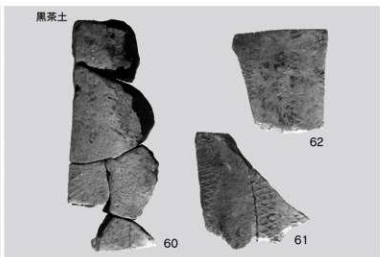
Pl10-1 国松9黑茶土出土遺物



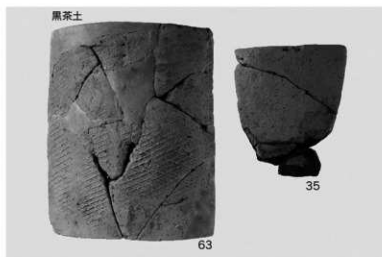
Pl10-2 国松9黑茶土出土遺物



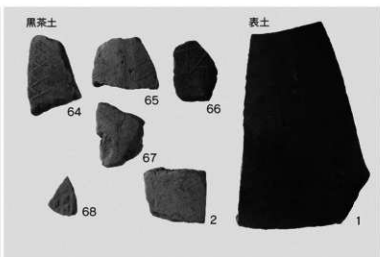
Pl10-3 国松9黑茶土出土遺物



Pl10-4 国松9黑茶土出土遺物



Pl10-5 国松9黑茶土出土遺物



Pl10-6 国松9黑茶土、表土出土遺物



Pla11-1 国松10 調査前状況 (東から)



Pla11-2 国松10 Tr01東端部土層観察 (東から)



Pla11-3 国松10 Tr01東端部土層観察詳細 (南東から)



Pla11-4 国松10 Tr02土層観察 (東から)



Pla11-5 国松10 Tr02土層観察 (南東から)



Pla11-6 国松10 Tr03土層観察 (東から)

国松10次



Pla12-1 国松10 Tr03土層観察 (南東から)



Pla12-2 国松10 Tr04土層観察 (東から)



Pla12-3 国松10 Tr04土層観察 (南東から)



Pla12-4 国松10 Tr05土層観察 (西から)



Pla12-5 国松10 Tr05土層観察 (南西から)



Pla12-6 国松10 Tr05土層詳細観察 (北から)



Plat13-1 尼18A トレンチ掘り下げ状況 (東から)



Plat13-2 尼18B トレンチ掘り下げ状況 (北から)

尼18次

18SD001灰茶色砂



1

Pla14-1 尼18SD001灰茶色砂 弥生土器甕

18SX002



1

Pla14-2 尼18SX002 弥生土器甕

18SX002



2

Pla14-3 尼18SX002 弥生土器甕 (外面)

18SX002



2

Pla14-4 尼18SX002 弥生土器甕 (内面)

18SX002



3

Pla14-5 尼18SX002 弥生土器甕 (外面)

18SX002



3

Pla14-6 尼18SX002 弥生土器甕 (内面)

18SX004



1

Pla14-7 尼18SX004 平瓦 (凸面)

18SX004



1

Pla14-8 尼18SX004 平瓦 (凹面)

報告書抄録

ふりがな	だざいふ・こくぶちくいせきぐん2
書名	太宰府・国分地区遺跡群2
副書名	国分松本遺跡第9・10次調査、筑前国分尼寺跡第18次調査
シリーズ名	太宰府市の文化財
シリーズ番号	第94集
編著者	柳 智子、山村信榮、井上信正、中島恒次郎
編集機関	太宰府市教育委員会
所在地	福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号
発行年月日	2007（平成19）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		座標		調査期間		調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
こくぶまつもといせき 国分松本遺跡 第9次調査	太宰府市 国分3丁目1352	402214	210306-9	57384.0	-46000.0	20051007	20060818	1720	障ノ尾雨水幹線工事事業
こくぶまつもといせき 国分松本遺跡 第10次調査	太宰府市 国分2丁目1356	402214	210306-10	57532.0	-45789.0	20070126	20070331	18	障ノ尾雨水幹線工事事業
ちくせんこくぶんにじあつ 筑前国分尼寺跡 第18次調査	太宰府市 国分2丁目453-2	402214	210049-18	57457.0	-45977.0	20030925	20031014	9.6	専用住宅建築

所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構	主要遺物	特記事項
国分松本遺跡 第9次調査	集落跡	弥生・古代	溝、河川跡、柱穴	朝鮮系瓦、土器、瓦	
国分松本遺跡 第10次調査	河川跡	古代	河川跡	瓦	
筑前国分尼寺跡 第18次調査	寺院跡	古代	溝	瓦、弥生土器	

太宰府市の文化財 第94集

太宰府・国分地区遺跡群2

－国分松本遺跡第9・10次調査－

－筑前国分尼寺跡第18次調査－

平成19年3月

編集発行 太宰府市教育委員会
福岡県太宰府市観世音寺1-1-1

印刷 株式会社 三光
福岡県福岡市博多区山王1丁目14-4